西遊行嚢抄

十五之下

和書門
二九四五三 號
二三一 函
一一 架
五一 冊
類

内閣文庫
和 書 類
二九四五三 號
五一 冊
一七七 函
三一 架

内閣文庫
番號 和 29453
冊數 51 (13)
函號 177 1134

地七四ノ五

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

西遊行嚢抄十五之下 一

日本事蹟考 日春齋作

難波此郷今大坂也昔 仁徳天皇為太子時百濟國王仁持

論語來教之然詠倭歌以勸即位世傳以為盛事共歌詠梅

得此與之義難波者太子之所居也

私曰大鷦鷯尊ノヲハシマシタル旧跡ハ今天王寺

辺高津 天神ナリ 高津ノ宮ノ跡ナル故ニ高津ノ天

神ト云トナリ然ハ難波ハ總名ニテ天王寺ヲモ難

波寺ト云由アレハ天王寺ノ辺ヨリ大坂ノ町中ニ

十難波ナル歟又難波島ト云ハ大坂町ヨリ南ノ勘

助島ノ並ニアリ是最難波ノ浦ト云ニ使アリトイ

ヘ𪜈是モ後人ノ名ツケタル島ナレハ證トシカタ

内一一〇八二號
堀氏文庫
花廼家文庫
摂州 難波江 堀江 三津 木津川

シ只此辺ノ總名ト心得ルカ大ヤウニテ不違ト覚
ユ
昔ハ或ハ浪波或ハ浪花ト書ト云ヽ何ノ書ニ見エ
ルヿカ不知
旧記ニ云
神武帝御年四十五自日向国起舩軍平筑紫到安藝國
明年三月入吉備国聚兵粮練士衆三年塵難波河内於
大和国孔舎衛坂詠長髄彦云々 日本紀
仁徳天皇諱大鷦鷯應神帝第四子也曰母仲姫命五百
城入彦皇子孫也皇子兄弟相譲不即于位凡三年遂二
十四歳即于位（王仁カ難波津和歌在古事）立磐之姫余為皇后都于難
波高津帝生日鷦鷯入産殿故為號先帝譲位于大鷦鷯
四年免課役賑貧民天皇登高屋望民家此屋岑寂炊起
不起三月悉除課役三載筑志従約風雨時若五穀豊饒
十リ七年群下券民富大悦タカキヤニノホリミレハノ御歳此時也同十
年科課役造宮室
同帝十一年難波令開堀江引南水建宮云々又曰難波
開堀江山崎河筋攝洲東生郡河内茨田郡同時民依敕
高麗人堀之云々
同帝六十二年大木大井川ヨリ流出渟河曲経南海入
難波大サ十囲也（此木ノ丁遠別大井川ノ所ニ記文）
履中天皇即位元年攝河内敕弟瑞歯別皇子殺仲皇子
于難波云々
欽明天皇即位十三年自百濟国献釈迦佛像物部尾輿
等奏曰本朝振古有神道而天下自平也患何不足事此
異神乎依之天皇容之及佛賜稲目大臣安置其家号向

原寺日本佛法伽藍成之始也
欽達天皇即位初以物部守屋為大連百済羅重奉経論
天皇好文史非佛法既戸皇子馬子大臣甚好佛法崇尊敬
貴疫病大起守屋奏曰是因信異佛軽国神矣遂毀堂焼
佛流其灰于堀江
皇極天皇二年二月十二日難波百済客館焼亡民家同
時多焼
天武天皇七年甘露降難波
聖武天皇東大寺ヲ造立セラレ金銅十六丈ノ盧舎那
佛ヲ安置ノ供養ヲ被遂シニ行基菩薩ヲ導師ニ請シ
給ヲ行基ノ曰綸命重ミシテ辞スルニ所ナシトイヘト
モ如斯ノ大願ハ只冥顕ノ所啓可被任候ハハ供養ノ
當日香花ヲ備ヘ唱伽陀自天竺梵僧ヲ奉請供養ヲ遂
行給ヘカミト申サレケレハ万里ノ波濤ヲ隔タル天
竺ヨリ俄ニ導師ノ来ンヿ疑シクハ思召ケレ圧行基
ノ計ヒ被申上ハ異儀ニ及ヘキニ非ストテ導師ヲ
未被定已ニ其日ニ成ケル朝行基難波沖ニ出テ西
向テ香花ミ座具ヲ展テ礼拝シ玉フニ五色ノ雲天ニ
聳一葉ノ舟浪ニ浮テ天竺ノ婆羅門僧正忽然トシテ
来給フ諸天蓋ヲ捧テ三津ノ濱松ハ雪ニカタフクカ
トアヤミテハ異香薫ス難波ノ梅ハ忽ニ春ヲ得タル
カト疑フ一時ノ奇特万人ノ信仰不斜行基菩薩則婆
羅門僧正ノ御手ヲ引テ

　霊山の釈迦のみもとに契りてし真如くちせすあひみつるかな

ト一首ノ和歌ヲ詠シ給ヘハ婆羅門僧正

かひらゑにともに契りしかひありて文殊のみかほあひみつるかな
此贈答ノ和歌拾遺集釈教ノ部ニ入ル詞書
南天竺より東大寺に供養にあひに菩提かなぎさに
つきたりけるときよめると云々　此事ハ委南遊行
嚢抄東大寺ノ条下　記之仍略之婆羅門僧正ヲ如ハ
菩提ト云後ニ聖武帝僧正ニナシ給フナリ僧正ニ十
リシ事ハ南都ノ大安寺ノ条下ニ見ユ
旧記曰聖武帝天平十八年婆羅門僧自天竺来朝孝謙
帝天平宝字四年二月廿五日於和州入滅云々
伊勢物語にいはく
むかしをとこはのくにゝしるよしゝていきてすみけり
ゆゑもなきのくあすまもれかうり　いきけるとなむ

なみまにハ船ともの（あまり）さそひて
あまは瀬をはさみてそ河のかはらにまた出れ世代う
ミつゝすみふてこましをかそうって人こそ（　）丹方
梨
題しらす
古今
いとしてあやなみにみ川にあへて塩やくとて我そ悲しきあまの人
ふ宗
あまのすむ海なくて（　）れ時はちかきそれ
あまをすむふ生れにて（　）みれにわりそれ我そなからぬつらなれ　貫之
我ときみあまよそれうにまこしらにきめ須川のあまとなりにき
此の家はあれ人のいとしかりことゝりけれをし

春のおとこともあれなりけれとも尓ふての序
のてうまうつ行方よむかひてよみつかはしける
つらゆき昔をあれとなむ

返し

あまをかうかへき清をかきかへさて人の後のあまとりなれ
なよ川よさつゝやこれをもこりつ今は心も
この家は古今の序よ行き留て風の家や仁徳
帝の此住のよ我さめ春れや新ては梅の家
みてん住此吕住を去て先書り出也家鳥依の中
の風の家の礼とよと或掛掛よ之回
平定文ちもそうりあまを此りへきまられとい
れをとうり待りあまれ

序

後撰　御かたみあつれを人何かれ此はあかるなふりのうこへまま行　右衛
返し
君はなほかうさてへよはのつれほうえ見よ出く我まやはあふぬ
女ともうられもとすりつくしまりさしくうを
こうつさいりく
あまあのく行かを行すみ我つくし出此心也あうしそうろそ　大江太閤御祖母
あまよもよもうへし待てまうくくてあれ行
うつきしみ枝此結まれみ郷公の明き鳥る我きくて
郷公ねくてなされ恵きるい常れ此そ露けうりける　伊勢
ての主我呂るへとて多れ人あるとしくれ女の
返すに
兼輔朝臣
あまいううかしつもの何れ此何しつれひとへも君我我や滿つれ

人のむすめのはゝなる侍りて
よみ人しらず
業平をしのびてかよひけるに[illegible]ありける女の[illegible]
ゆくかよひありける女の心とありけることゝて侍く
つきよにはこよひ月の出侍りけるをいまさく[illegible]
くらしかねつるかなしみやまさるらむ
よみ人しらず
あふさかの関のあらしのかなしさに人のこゝろを
いとゞひきとゞめてさそふなるあはれとこそせいし
わかれ人にかへりきてはかへるなりけりてつ
ゆきもしらぬ[illegible]
よみ人しらず
あかつきのわかれしより人こそあまたありしに我こそは

あまのかはらのわかるゝ人よりて[illegible]ありける暁ノ森
のゆきありける[illegible]のつゆありけるとぞ
旅送　わかるゝを[illegible]おもひけむ[illegible]
伊勢
[illegible]のいへにかみあまりていかなる[illegible]ありける
たちわけのなかれはてぬる
恵慶法師
あまのかはあけぬれはうけるましきありつのゆふひのこゝろもやすらむ
ほのかにみ[illegible]人は[illegible]てつかはしける
旅送　なふかゝしたびゆくはいもかきみ[illegible]
あま[illegible]には人しれずあひ女まてありける
ものおもふかなしさ[illegible]
やましきなをもしたひて[illegible]

思けるにてもこゝろハえあらさりけれハなかと
いひつかハしけることハかしこのよそれ
君ゆりてかしろきをとふかまいくてなるまれしいすみかき
返し
あしよしのんとそおもふなるよハなのこゝハみちかき
難波 よみ人しらす
つれなきのなにハえのなくさむ我ハなにハとなれなにとこゝよみそ
読しらす
津のくにのなにハわたりにつくるなるこやといはなむゆきてみるへく
きこえけれハ 人丸
難波人いつしひくくるまハあまたあれとそのなかにそとめて はやき
浪冷泉院の御時后宮の歌合によみける
波提遠 をりつ浪のさきハなにはえにれ何しれ物をいかゝ白雪 藤原能宗

難波潟
なにはかた浦ふくかせになみたてハつのくむあしのみえみみえすみ まゝ人 家綱
春なれハなにハのうらもかすみつゝゆくてこそみるへくそてかへる 藤原為家
あはれとハ寶塚をちよりそむかしたちひくれハ霧かゝるかな
正月なれハ 月の夜にそ 物思へハこゝろ人なれのよい
ひなのハ よみ
ふみえ人ハ見きやはの雲ハ霞ハいたつらの夕月夜 能因法師
なにはえのいつくかハしかも 月経紹ほか
よそにたにふかく待さきてもいまて 月と
ふるあをひて浦うつれかなく 友 ことてひし
きかけいかくひとをこひもつ待つハなきとも
かぬ舟ハつなてよ浦のまよひとかひとしかなきそ 藤原秀能
なにはかよさして待ち路よりハ一条院れかすみ給

ひとり哉春よをしいふさこゝろよこゝろまうて暮哉之

ひかく

いかにつれなき人をまちはかなき袖となみたおちぬればひかりなき　源行家朝臣

かくはみて給ふらむ哉つくしまきりて、のれ行家朝臣

浪のもとよつらかりし哉

せひわたるあれ如く見れ浦さひて行しの字こそなふん　伊勢大輔

永承四年内裏の歌合よちるとしもを哉

春よいふあきのさくら内ちろうつゝひとたて忘きこ也

いまいつる今日つくしつれてよれ春よいふ新ら山のおし出るよ　太宰大弐

出学のひしき御縁経紙哉しはるらは哉よるて　あま

たよせを見つ歌よ世よ窮行るむ志たし

ここをとりにしてしたる

津の國のなにはの春は夢なれや月のひかりにまよひてこそ　狂女

今京古歌京花を詠して　おもふ高津の宮月の出なむ

小山二野行く村ちまよりうつつ春哉さなて　師頼

よ見哉

春の夜は江の月の宿の名にし負ふもちゆる船をとこそ　六条右大臣

詞花五月雨は春の江のみつしみやまれ蛍哉　源光季

神祇伯顕仲廣田よて歌合し侍とて暮月述懐と

いつまでとみてそとしひて待里ははつくはし

よまれ

春よい江の月のくまなきや霞月さえて我身ひとつの志川まつ君　九条太政大臣

新院位よおりし時殿前にて京草を論争

いつはりをみしよみ待里にて哉

なにはえのしけきあしまをこく舟はさほのおとにそゆくかたをしる 大蔵卿行宗

百首哥奉りける時恋の哥とてよめる

千載集に[illegible]津の国の[illegible]たえぬ[illegible] 季通朝臣

[illegible]しのふ[illegible] 賀茂成保

百首哥めしける時[illegible]よみ侍る

なにはいりえのもにうつもるゝ玉かしはあらはれて[illegible] 顕輔

堀川院御時百首哥奉りけるによめる

恋の心をよめる

あしねはふ[illegible]てすまぬ[illegible] 俊頼

[illegible]

なにはかた[illegible]ひとよ[illegible] [illegible]

摂政右大臣家哥合に旅宿にあふ恋といふ

こゝろを

なにはえのあしのかりねの一よゆへみをつくしてやこひわたるへき 皇嘉門院別当

眺望のこゝろをよみ侍る

なにはかたしほちはるかに見わたせはかすみにうかふおきのつりふね 円玄法師

[illegible]哥よみ合侍りけるに[illegible]

新古今
夕月夜しほみちくらしなにはえのあしのわかはをこゆるしらなみ 藤原秀能

百首哥奉りしとき

なにはかたかすまぬなみもかすみけりうつるもくもるおほろ月夜に 源具親

建仁元年八月十五夜和哥所哥合に海辺月と
いふこゝろを

わすれしななにはの秋のよはのそらことうらにすむ月はみるとも 宜秋門院丹後

津の国に侍りける道済のもとへつかはし
ける

友まつとあめまとてこしかとも難波の浦に秋そくれゆく　能因法師

題しらす

津の国の難波の春は夢なれや葦のかれはに風わたるなり　西行

崇徳院に十首歌奉りける時に

冬かれのよりしなにはもまたはしらぬ葦のかれはにしもそおきける　大納言成通

大江嘉言つしまのかみにてくたりけるに

まこもかる江の[illegible]みて[illegible]

あしかりしてなく[illegible]きつて　能因法師

あしまより[illegible]とをき世の難波にかよふ[illegible]

去年今年[illegible]難波の浦に[illegible]て

よみ侍ける

さ夜ふかく[illegible]難波の浦[illegible]

入道前関白家百首歌よみ侍けるに　[illegible]

難波人葦火たく屋に宿かりてすゝろに袖のしほたるゝかな　俊成

和歌所歌合に海辺恋といふことを

難波人いかなるえにかくちはてむあふことなみにみをつくしつゝ　後京極摂政

題不知

難波かたみしかき葦のふしのまもあはてこの世をすくしてよとや　伊勢

題しらす

難波かた塩ひにあさるあしたつも月かたふけは声のうらむる　俊恵法師

題不知

難波めか衣ほすとてかりてたく葦火のけふりたゝぬ日そなき　貫之

題不知

[illegible]川風秋に吹にし難波かた暁かけて[illegible]　権中納言定家

新勅撰に[illegible]津の国の難波の[illegible]　権中納言長方

なにはめのこやくもにひれふきほしゆくつきかけてもなほやなに　雅経

なにはかたしほみつ浪のゆふくれはつらにはた声もさむきすれ　左京権師　公朝

なにはえにみをつくしつゝなれそまのよ見えけり

大伴のたかしの浜の松かねを枕にぬれと家しのはゆ　置始東人

題しらす

續後撰　雑　難波にまかりていにしへしりたる人をみしかは秋比たる十六夜の月　知家

こひし侍て

すむ月はいくよなにはのみやならし古き都に秋を猶みむ　前内大臣　基

題しらす

なにはかた浦ふく風に浪たてはつのくむあしの見えみ見えすみ　よみ人不知

永暦元年内裏後度当座会

なにはえにかしこみえしあしの花の雪にこやは出の庵も埋もれにけり　直房

題しらす

難波なることあしくみをつくしても世々にやらん根の門　よみ人不知

續古今

心ゆくらん人のぬれや露ひらんなにはなる河のあしなにをなる　後京極

なにはつに冬こもりせし花なれやひらのゝ松にふれる白雪　家隆

正治百首歌に

なには人かりしほやまにあしのなかにはやりつ　守覚法親王

さしこむ難波のうらさへなにはのみつの浪　讀人不知

あしのこゝろを

志つむへきひとをなにはにかゝるこやの思ひにそよん　中務卿親王

題しらす

なにはかたしほひにたちてみわたせは淡路の島に田鶴わたる見ゆ　よみ人しらす

江上霜といふことを

難波江のしほひのかたや霜ふらん河しまにちとりなきわたるなり　順徳院

弘長元年百首歌に　納言

津の国のなにはの里の浜風にあしの葉そよき秋風そ吹　信実

弘安二年亀山院御めくりて十首歌よみ給ひし

に秋寒芦　後宇多院御製

なにはかたよるみつしほの影ふけてあしの葉そよく秋の夜の月　頼綱

人みな南を暗夢の秋　延政法印

人ことのたのみかたさになにはなるあしのうらはのうらみつるかな

卯月のつこもりの頃に津の国にて難波わたりにまかりて

能因法師

続拾遺

卯月まてなにはの浦にまかりて侍けるに人々なさけあるよしあなかちにし侍りしに

津の国のなにはわたりの芦の葉のしけきやこれ女とそ

思ふのみかはつらし　兼盛

紫式部

なにはかたむれたる鳥のもろ声にあはれもの思はぬ浦しなはに

歌し侍ける　宗尊親王

浦さひて難波の春の霞にもかすみあへぬは島や海

浦霞といふことを

如願法師

難波江にもしほたれつゝなにはえにみつしほもみちてそゆく

秋歌の中に　権僧正実伊

この風やなにはの浦のしほかせに人のしらなくやまた衣うつなり

新後撰　とまりけるもしほなにはの田みのゝ鶴はみなれしつまに　津守経国

玉葉　なにはえや汀の丸やの楼によする汐風の寒けしる哉　平経盛

続千載　なにはかたあまのかりねの宿もなし浦風寒きよるの衣手　藤原輔記

照る月の入江の関の白波によるのしらへの月かけもなし
月ともなひくよみ侍りける　宗俊

柿の葉のかきつくしほの磯なれる汐枕かさにきく　大僧正行尊

夕されは難波のうらはかすみてみえこえて芦の葉かせのうちそよくなり

續千載　なにはかたいりしほかくるあしわかの末葉もよはやはるやかれ道なるらん　源朝臣

なにはえやあしのかりねの宿にまたかけまつ月れ新かけ　寂蓮法師

難波江のよしあしわかぬ汐風に霜をもおく千鳥なくらむ　よみ人しらす

難波江や松かよふ入江に船とめていく夜かもつ月のよあけかた　権大納言家房

新千載　月影の難波の芦もなくさむや霞かの秋れなかりけり　[illegible]女

新拾遺　難波江の汀の芦に霜さえて浦風さむき朝ほらけかな　西行法師

浪の上に月のしらへは難波かた芦のかりねを船にさへやさそふらん　前権大納言実教

亭子院なまよたゝみ行幸のとし

あかはこ月も出しほの浦風によする人定ぬなくさみなし　女蔵人万代

須磨のうらや一枝のやとりにひとりあかしなれ行物をおもひのきぬ　源光貞

あはれなれとこゝろにもなく風寒て汀の千鳥夜よなくなり　俊成

なれにし人みをなれしそなへ行物の一枝にそ秋風ふきて

ありえて年百年をかきしられ露を　紫式部　従二位家隆

新後拾遺雑　須磨の浦の行くれ八重かき霞めるに霞て　まくはしみやとも　従三位経

新後撰　須磨の浦の千鳥なきてゆく海のあまりもしらぬやかくる江の人　公実

月清　むかしをおもひの浦はなけきのけふりの行ひらくやつねならぬ世の中に一声　後京極摂政

同　あまの住む浦はとぢて月さへ氷とぢて月さへむすふやことは　同

同　あまの河に浪や花咲く桜かな今宵そかるゝ浦風そ吹く　同

千秋詠藻　夢路をたとりゆくあまもふね沖に出てこしあかしもや　俊成

拾遺愚草　夜半の光をよそにあまの苫屋の軒のあかりそ風　定家

御集　秋かせあまの行しもの浦風にこゝろのこれ袖衣かえすなり　後京極摂政

山家集　あまはやのしほひにむれて出て白河の浦にひろひひろひみ　西行

一字抄 なにはえにけふこそみつれあしのまにしら露をつゆむすひはえてそみえける 匡房

新拾 よしあしもこゝろなにはをとふ人のあしまをわけていくとせへける 我仏入道 家良

後拾集 なにはなるうちかけし池のみくさもなみかくれ春はうへてそ見ゆる 伊勢大輔

現存 なにはかた浦風さむみ汐みちくれは小松か浦にちとりなくなり 勝命法師

夫木集 百千鳥なくや春へのなにはかた浦風ふかく白き梅かえ 家経

同 岸の松よきみにけしなにはかた浦なみこえてさやくこの花 同

同 なにはゝ今は春へとうちなしてしまかくれおほえる玉柳かな 仲業

同 なにはかたしほ路にかすむ春の日に出て松にかゝるあまのつりふね 為道

同 なにはかたかすむ浦わのあまのこゑ松乃釣舟 兼経

同 難波かた花もかすむ春の夜はみしをかすかにきく浦風 安嘉門院四条

同 難波やなにはは入江の夕かすみよせてかへらぬ春の夜かな 為氏

同 なにはゝ人かしこまれあやめかり浦にやそそひてやなかく流 経家

同 芦のうへみかへりそて春のあはれをかえしなにはにあふこそしらるれ 好忠

同 いさゝ浦に咲きそめしもなにはえの芦のはなすゝき萩のうら 光俊

同 なみよするなにはの里の芦枕月とむよしや詫ひさひしらん　藤原つね

同 難波かたあしの葉吹浦風に浪まに澄める月のさやけさ　太上

同 うらむ難波の江の秋の夜は梢もさやく紅葉ちりけり　定家

同 芦の葉にかよふ夕風音たえぬ難波かたむすこの山へも見えぬらむ　寂蓮

同 さし汐の月影さえてなにはかた沖の白洲に千鳥鳴なり　俊恵法師

同 なにはえや芦の高瀬の浪さへていく夜もさえぬ鴨の村鳥　登蓮法師

同 千鳥鳴夜半の寒けき浪のおとは月影さえしなにはえの浦　西行

同 なにはかた塩やく海士の煙にも難波なる月の影ぞさひしき　家隆

同 葉かへぬ泊へと立くらし見えつの月影に難波のあしの葉　三条公

同 旅寝する宿なき難波の浦の蜑の苫やに月もすむらん　為家

同 なにはかた鉄さひ浅き沖の月にかくれぬ浦の松かせ　為氏

同 なにはかた汐干しほみちなかき秋の夜のうきねにつらき浦のまつかせ　忠家

同 思ひやるなにはの浦にみるめなき今宵のせ路の月もかくや　伴業

蘆屋 なにはかたなる紀の浪のよるや海に浪へて暁影をみちたる月や影る　藤原

夫木 その京見に行ける難波のみちよりしきなかなれのちり 及漸

菟玖波集 題しらす

草の名も所によりてかはるなり 救済法師

難波の芦は伊勢の浜荻

十題雅詠曰

更入難波蘆 難波不問梅 蘆枯葦折亦奇哉 猶遺旧都人愛

同京

細憶難波帝業隆 勝區一々入望中 芦根潮汐晨昏到

梅蕾芬芳今古同 滄海氣晴波浪静 天日麗景光濃者

時詩諷誦王仁詠 讓位佳名豈有窮

太平記曰康安元年六月十八日ヨリ同十月マテ地震毎日毎夜止トキナシ同十月廿四日難波ノ沖數百町半時許乾テ無量ノ魚尼沂ノ上ニ吻キケル所ニ又俄ニ汐満来漫々タル海トナル此時阿波ノ鳴戸俄ニ潮去テ陸トナル高ク峙タル岩ノ上ニ筒ノセハリニテ尋許ナル太鼓

ニ銀ノモヤウヲ打テ面ニハ巴ヲカキ基ニハ八竜拏ハ
セタルカアラハレ出タリ大キナル鐘ホヲコシラヘテ
打之ケレハ天ニ響キ地ヲ動シテ三時許ナリタリケル
カ山崩レテ谷ニ落入汐涌テ天ニ漲リケリ四五日アリ
テ後ハ海中ニヤ入ケン天ニヤノホリケン潮ハ如元湛
涌テ太鼓ハ不見云々
弘治元年三月廿五日ノ夜摂州難波ノ浦ニ星多ク下テ
海ニ入ト云々

堀江

旧記曰仁徳天皇十一年難波令開堀江山崎川筋摂津
国東生郡河内茨田郡堤同時ニ成依敕高麗人堀之云々
又枕詞ニヨシテルヤナニハホリ江ナト云ヿモ件ノ
堀ノ内ハ船ヲ押出ルト云詞也云々押照ト云ハ誤レ
リトナリ
摂州名所考ト云書ニ
難波　堀江ト云ハ仁徳帝即位十一年十月ニ水ハ流
アシク霖雨ニハ潮逆ノホリテ村里ニ溢レ行客ノ煩
トナル故ニ敕シテ宮ノ北ノ野原ニ屈ヲ通シ南水ヲ
引テ西海ニ入其名ヲ難波堀江ト云今ノ木津村ノ入
江是ナリ云々
私曰然レハ今ノ勘助島難波島ノ辺ナルヘシ是木
津ノ入江ナリ

なにはの
かはの家なにはの浦の西ほとりにことは世に
てはなし人のわすれぬ舟たにいつかはなにはえ

ア江は古き事をつたへきとし給ふ　古きことは
用らるゝなり
いにしへは難波堀江にすむ月の影さへて清し　忠岑
万葉十　押てるやなにはほり江のあしへには雁ねたるかも霜のふらくに　よみ人しらす
同　舟きほふほり江の川のみなきはにきゐつゝなくはみやこ鳥かも　人麿
同廿　堀江より朝しほみちによるこつみ貝にありせはつとにせましを　家持
古今　ほり江こくたなゝし小舟こきかへりおなし人にやこひわたりなむ　河原左大臣
題しらす
後撰　波こゆる堀江にうきくぬる鳥もものを思ふ夜の霜にいかにねん　よみ人しらす

君をのみ思ひつゝ人は堀江のむかしにいはへ引かれぬ　定文
題しらす
拾遺　津の国のなには堀江のふかくのみ思ひし我はなにとこゝろの　よみ人しらす
つくしにまかりける時　はりまのくに
のかたへ　能因か　つかはし兼盛
後拾遺　命あらはいまかへりこむ津の国のなには堀江のあしのうら葉を　大江嘉言
船江にすむほり江といふ所をすきてよめる
遠くてよなにはのあしのふかしまるほり江の跡はつゆそへよ　若狭守通宗
荘太后宮家の歌合によめる
詞花　大月夜難波ほり江の芦かれてみてやみのまさる頃しん　源忠季
続古今　さ夜ふけて堀江こくなる松浦船梶音高うしみをはやみかも　人丸

続拾遺 風寒くいり江のあしまさく氷のまもるハうつる月そさやけき　平政村

続千載 堀江にハ玉しかましを大君の御船こかんとかねてしりせは　橘奈良麿

続後拾遺 さしてゆく舟やあまたに堀江こく玉もる秋の光をそへつゝ　為家

月影ハ夜半ハ堀江の河しけみ月のみなとてなかれ行らん　為藤

今ハとや堀江のをふねこきかへる人もみえぬ津のわたり　津守国夏

新後拾遺 ほり江橋霞をわけて舟出するあまのよひこゑきこゆなり　為家

芦根はふ堀江の松にかけてみし夜半にみちてなかるゝ　摂政太政大臣

新続古今 夢にさへ堀江のあみのよるよるはしけきにそらもよそにみゆらん　前摂政太政大臣

夫木 高瀬船よるよる堀江のみをつくしかけてそなくらん蛙なく也　能仲

同 あけぬるや夜半ハ堀江のあやめ草みえわたるまてふかくそありける　後京極摂政

同 鴨のゐる夜半ハ堀江に月さえてあやのうきしきねもうくもなし　家房

三津或御津 西生郡ノ中也同難波ノ内也

或書曰三津ノ浦ト云ハ敷津高津難波津此三所ヲ合テ三津ト云ト也

或ハ皇居ノ地ナレハ御津ト云ト然レハ一所ヲサシテ三津ト云所ハナカルヘシト云ヽ猶可尋之

敷津ハ住吉ニ近シ高津ハ天王寺ニ近シ但シ今ノ八軒屋ノ辺ヲ云ト云説モアリ難波津トハ御城辺也

其所ニ到テ古歌可記之江例ニ同名アリ

万葉一 大伴の三津の浜なる忘貝家なる妹を忘れて思へや 身人 詠之

同三 しほひの三津のあまのくゝつもて玉もかるらんいさゆきてみむ 角丸

同 三津の崎なみをかしこみこもり江の舟漕君か行かの島に 人丸

同十五 大伴の三津に船のり漕出てハいつれの島にいほりせんわれ よみ人不知

歌[illegible]

古今 君か名も我名もたてし難波なる三津ともいふなあひきといはし よみ人不知

歌[illegible]

さしてゆく[illegible]三津[illegible] 同

[illegible]三津のあまとなりにけり よみ人不知

このうたはあはれくのいそく[illegible]

[illegible]三津の[illegible]

[illegible]

つゝハせうちは

近し

[illegible]三津の[illegible]

船のうちへ漕ぎくる舟の玉よ乃なびきてみるみ
もしの葉かくさ

後撰　なにはつをけふこそみつの浦ことにこれやこの世をうみわたる船　業平

新古今　もろこしにてよみ侍りける
いさこともはやくひのもとへ大伴のみつの浜松まちこひぬらむ　山上憶良

題しらす
磯なれて心もとけぬこも枕あらくなかけそみつの志らなみ　権中納言定家

なにはのみつのてらにてあしのはのそよくを
きゝて
あしそよくしほせのなみのいつまてかうき世の中にうかひわたらん　行基菩薩

新勅撰　こゝろみしなにはにもみつの浦によるけふりくらへやくゆるしほ火　雅経

月
つの国のみつとはいひて山しろのとはにあはんことをこそ思へ　元真

題しらす
続後撰　なにはかたみつの浦にもいまはしらぬよのみよりまさる秋半の月　知家
覚ゆなけきそとおもひまえる

大伴のみつの松原浦にみるゝなりしよ思そうなしき　行能
まれなる中に

続古今　大伴のみつの浜松かすむなりはや日のもとに春やきぬらん　中務卿親王

題しらす
いつくとき人の為にや露しらんなにはほりえのみつのあしまの　後鳥羽院
吹田より十五夜みつ
なにはかたみつのあしまにてらされてあきのよの月をなかめつるかな　前太政大臣

続拾遺　松さむきみつの浜への小夜ちとりひかたの霧に啼やなくらん　土御門院

続千載 浦の上に嵐ふきて大伴のたかしの浜松声さわぐらん 光明峯寺入道

夕ぐれは松風寒し大伴のたかしの浦の秋の夜の月 宗尊親王

続後拾遺 暮ぬともたかしをこえて今夜はたれか枕にかはせん一夜手を 為家卿女

あらき浪よせてもみえんとみえつらんこそ眺なき浦の沖中なかまで 安嘉門院大弐

新千載 秋の夜は浪路はるかに大伴のたかしの浦の沖にこそなくなむ 頼阿

いくせいつもきてまし大伴のたかしの浜松いかゞなるらん 邦省親王

新拾遺 大伴のたかしの浜松神さびて幾とせのつもれ秋のたかしの浦の色 経信

亭子院御まへにて絹を賜ひしとき 貞数親王

君が代はたへなる絹をも松にかりしたかしの浜のまさごかすしつくしてひろふらん

立田山こえて大伴のたかしの浦はすまやすむらむ 兼澄

待ちしこといはで君を見てかたみのたかしの浜松 家隆

西年のころ光厳院禅定法皇南山におはしませしときに 光厳

よ御しらやこと法につけてのち後の松の光厳

院ことにてし幽閑の地にすみはじめてのち

納帥の恨ときおほせて

高きまちてみたかしの浜松かはらむとひのまちのをまちの手とよ

太平記曰光嚴院禪定法皇ハ正平七年ノ比南山賀名生ノ奧ヨリ楚ノ囚ヲ許サレサセ給テ都ヘ還幸成タリシ後世中ヲイトヽ憂モノニ思召知セ玉シカハ姑躰山ノ雲ヲ辭シ汾水陽ノ花ヲ捨テ猶御身ヲ輕クモタハヤト思召ケリ御荒增ノ末通リテ方袍円頂ノ出塵ノ徒ト成セ玉ヒシカハ伏見ノ里ノ奧光嚴院ト聞エシ幽閑ノ地ニソ住セ玉ヒケル是モ猶都近キ所ナレハ旧臣ノ參リ仕ヘントスルモ厭シク浮世ノ事ノ御耳ニ觸ルモ冷ク思召ケレハ來テ無所止去テ無住柱杖頭辺活路通ストヽ中峯和尚ノ被作送行ノ偈誠ニ由アリト御心ニ染テ人ヱツ行者ノ一人ニテモ不被召具只順覺ト申ケル僧一人御供ニテ山林斗藪ノ為ニ立出サセ給先西國ノ方ヲ御覧セントテ攝津ノ國難波浦ヲ過サセ給フ御津ノ濱松ノ霞渡リテ曙ノ氣色モノ哀ナリケレハ遥々ト御覧セラレテ

生とまりてみつの濱松霧むせん我身のかたみ世に　仲実

所題網引するみつの浜辺にさよふけて沖つしほかせ月そすみける　よみ人　宗

古今難波なるみつの堀江に住蛙のそこへ絶えてもおもひこそすれ

玉葉かすみにけり浪の山のあなたより舩こき出るみつの浦人　同

夫木紅葉さく梅のみつの浜風霧わけていくかすみなん　伊平

同うつろはむ友なきみつの秋の夜の梢もさやく紅葉てりける　為家

同　さしてなや難波堀江乃船よそひつまなく鹿の声ぞ聞ゆる　浄恵法師

同　難波かたなにはみ津の浜千鳥玉藻ノ靡て舟のよるよる　光俊

同　大伴の三津の浜への松風に追へて千鳥芦田鶴の声　家光

新撰六帖　玉坂の三津の湊よ芦原の声のそらに向ける　好忠

芦間池　塩町ノ薬師堂ノ後ニアリ

堀玉集　なにはかたみしかき池のみなそこに浅みとりなる春は来にけれ　伊勢

座摩宮　新遠江橋ノ辺槌本町並ニアリ大坂市中三大社之所ナリ所謂天満　活霊

當社也座摩ノ宮ハ住吉ノ同神ナリ表筒男中筒男

底筒男ノ神也

東照宮　元和二年ニ松平下總守源清国奉建立之開基

僧ハ三江和尚也別當九昌院

一此外大坂中寺社旧跡不可勝計

一後西院寛文十年八月廿三日大風雨堤同時従西海洪濤忽ニ起来テ洋溢難波堀近辺御里餘波到于牧方旅泊之客船悉ク為潮水顛倒溺死者不知員此時隠元ノ徒弟良溪師モ災ニ逢テ寂ス

一大坂御城近隣ノ名所旧跡ハ秀吉公天正年中堀ヲ多ク堀セ水道ヲ付カヘ玉フ此時昔ヨリ云傳タル所モ

アラスサマニ成行ト云ニ今ノ新川ニ渡シタル橋ノ
名ニ田蓑橋大江橋堀江橋ナトヽ云アリ加様ノ
事モ後代ニハ惑説ノ種トナルヘキト云人アリ

大坂両川口河ノ上町積之事 所謂木津傳法

木津川

一角ノ御番所ヨリ寺島ノ頭マテ六町二十間余
寺島ノ長サ十四町 幅川ノ口マテ十五町余
一同御番所ヨリ木津ノ御番所マテ十八町
或ハ二十二町ト云ヽ是ハ川ノ上ノ積也
一同御番所ヨリ難波島ノ島頭マテ二十四町 古三軒
屋マテ二十八町

一同御番所ヨリ難波島ノ民家在ル所マテハ三十二町
難波島ノ尻マテハ卅五町 但島ノ長サ十一町アリ
一難波島ノ尻ヨリ右三間屋川筋マテ一町
一三軒屋川筋ヨリ尻ナシ川筋マテ十三町
一尻ナシノ川筋ヨリ傳法ノ尻ナシノ川筋マテ十六町
但大樋マテ六町
一木津御番所ヨリ難波島ノ島頭マテ六町
難波島竪十一町 家居在ル所四町
一同御番所ヨリ三軒屋ノ人家ハツレヽマテ十二町

傳法川

一角ノ御番所ヨリ福島ノ御船屋マテ五町 同所ノ御
船屋ヨリ新家マテ四町

一角ノ御番所ヨリ四貫島ノ御番所マテ廿町但四貫島ノ長廿六町外ニ葭島六町アリ合卅二町余

一南傳法島頭ヨリ下ノ家ハツレマテ六町但葭島ノ分五町也　合三十七町

一南傳法川口ヨリ沖午ノ葭ノ際マテ廻リ傳法ノ尻ナシニテ十二町余

一戎島御番所ヨリ難波島ハ川口ヘ出傳法尻ナシマテ廻リ又戎島ノ御所ヘ廻リテハ道程二里三十町余也
　但沖手ヘ出テハ遠近アリ

右ハ寛文四辰年八月十一日ニ以町縄小船四艘ニテ御改如件

一自大坂諸方之道程 但従高麗橋

一南方

一天王寺行程三十五町

一住吉　行程二里

一堺泉州行程三里

一岸和田　行程七里

一紀州若山或和歌山行程十六里但別巻ニ委記之

一高野山　行程十六里但別巻ニ委記之

一有間　行程九里但別ニ記之

一三軒屋行程一里

一傳法　行程一里半
一神崎　行程二里
一尼崎　行程三里
一西宮　行程五里
一摩耶　行程八里
一兵庫　行程十一里
一須磨　行程十二里
一明石　行程十五里
一姫路　行程二十二里

北方
一長柄　行程九町
一吹田　行程二里
一伊丹　行程四里
一茨木　行程五里
一池田　行程五里
一勝尾寺　行程五里
一箕面　行程五里
一郡山　行程六里

一中山　行程　六里
一多田　行程　六里半
一能勢　行程　九里
一有馬　行程　九里
一三田　行程　十一里

東方

一平野　行程　二里
一八尾　行程　三里
一久寶寺　行程三里

一松原　行程　三里
一平岡　行程　三里半
一國分寺　行程　四里半
一上ノ太子　行程　五里
一下ノ太子　行程　二里半
一郡山　行程　八里
一奈良　行程　八里
一藤井寺　行程　八里

京方

国立公文書館
National Archives of Japan

一野江　行程一里
一岡山　行程三十町
一森口　行程二里
一牧方　行程五里
一橋本　行程七里
一淀　行程八里
一高槻　行程六里
一伏見　行程九里十二町
一京　行程十二里半
一大津　行程十四里半

自大坂到于江戸海上難所

一白井三崎ヨリ由崎ニテ紀州ノ内也
此間十二三里ノ所湊悪シ
一塩ノ御崎紀州ノ内也但汐ノカルヒアリテ悪シ
一サキ島十リ紀州ノ内也但シ沖ヘ三里出ル瀬ニテ大難所
一鳥羽志州アノリヨリ豆州下田ニテ七十五里ノ間潮ノ狂アリ遠江天竜十タ白輪駒形ノ沖十トアシヽ御前カ崎ト云所第一ノ難所也
一豆州下田ヨリ鎌倉三崎ニテ三十五里走水ノ沖ナトハ昔ヨリ有名難

所ナリ

自大坂有馬ヘノ道

一大坂ハ軒屋

神崎 三里 自大坂到于此

舟着ニテ繁昌ノ地也

伊丹 二里 自神崎到于此

旧塁アリ酒ヲ多ク造テ諸国ヘ出ス人家多シ富人多シ

小濱 一里 自伊丹到于此

此ヨリナヽセヽテ川多ク四十八ケ瀬トテアリ山路ナリ小濱ヨリ行程五十町ニ船坂ト云茶店アリ

奈麻瀬 一里 自小濱到于此

有馬 二里 自奈馬瀬到于此

當所ノ事京ヨリ湯本ヘノ記ニ委ク記之

自大坂諸方ノ城下ヘテ道程

摂州ノ内

尼崎ノ城ニ到ル行程三里 陸海同 青山播磨守居城

麻田 四里 青木甲斐守

保積　六里

高槻　六里　永井市正守

三田　十里　九鬼千之助

和泉之内

堺ニ到ル行程三里海陸共同　水野伊豫守　奉行

タウキ　五里　小出大隅守領之

岸和田城　七里　岡部内膳正守之

河内之内

舟南　四里　高木勘解由

渚　六里　永井伊賀守

佐山　六里　北条伊勢守

大和之内

小泉　六里半　但クラカリ越　片桐石見守

郡山城　七里　但クラカリ越　本多下野守

戒重　七里　但クラカリ越　織田豊前守

柳本　七里　但クラカリ越　織田源七郎

奈良　八里　但クラカリ越　神尾飛驒守

俵本　八里　但クラカリ越　平野丹波守
新庄　八里　但空出越
高取　十三里　仝越　植村右衛門佐
柳生　十二里　但クラカリ越　柳生飛騨守
畑　十六里　同越　奥田八郎右衛門
宇多　十六里　織田伊豆守
神保左京
山城之内
淀　八里　石川主殿頭

伏見　五里半　奉行
京二條御城　十一里
伊賀之内
上野　十七里
奈張　十九里　和泉守家司藤堂宮内在所
伊勢之内
亀山　三十一里半　板倉隠岐守
阿野津　二十九里余　藤堂和泉守
山田　三十四里

同所司代屋敷ゟ三十九里

松坂　三十里　紀伊大納言殿持

田丸　廿八里半　紀伊殿家司久野丹波守

桑名　四十里　松平越中守

長島　四十二里　松平佐渡守

神戸　三十九里余　石川主水

土方市正

伊賀之内

鳥羽　三十七里半　松平和泉守

尾張之内

名護屋　四十八里半　尾張大納言殿

犬山　同家司成瀬隼人正

近江之内

膳所　十四里半　本多隠岐守

大溝　二十里　分部隼人正

水口　加藤佐渡守

仁正寺　二十五里　市橋下総守

彦根　二十八里余　井伊掃部頭

国立公文書館
National Archives of Japan

小室	三十三里余	小堀備中守
美濃之内		
大垣	三十七里半	戸田采女
加納	四十一里半	松平丹波守
高巣	四十四里	小笠原土佐守
郡上	五十六里半	井上中務少輔
苗木	六十一里	遠山信濃守
岩村	六十二里半	丹羽式部少輔
若狭之内		
小濵	三十九里	酒井修理大夫
越前之内		
福井	五十三里	松平兵部大輔
丸岡	五十七里半	本多飛騨守
大野	五十九里	土井内記
松岡	五十五里半	松平中務大輔
吉江	五十五里	松平兵部大輔家司
府中	四十七里	本多内藏助

加賀之内
金沢　七十五里半　松平加賀守
小松　六十七里半
大聖寺　六十一里半　松平飛騨守
越中之内
富山　松平大蔵大輔
丹波之内
亀山　十二里　久世出雲守
園部　十六里　小出信濃守
篠山　二十五里半　松平駿河守
福知山　二十三里半　朽木伊豫守
綾部　二十四里半　九鬼式部少輔
山家　二十四里半　谷出羽守
丹後之内
田辺　二十八里　牧野佐渡守
宮津　三十五里　阿部對馬守
嶺山　四十里半　京極主膳正
但馬之内

出石　三十里　小出備前守

因幡之内

取鳥　五十三里半　松平相模守

伯耆之内

米子　七十三里半　荒尾但馬
松平相模守家臣

出雲之内

松江　七十五里　松平出羽守

石見之内

吉水　八十九里

津和野　百八里　亀井能登守

濵田　百六里　松平周防守

播磨之内

明石　十五里　陸海同

小野　陸十九里　海廿四里半内四里陸　一柳對馬守

姫路　二十五里　本多中務大輔

林田　陸廿七里　海上三十里内四里陸　建部内匠頭

新宮　三十里　陸海同舟着ヨリ四里陸

赤穂　三十二里海上八三十一里　浅野采女正

福本　三十二里

美作之内

津山　陸四十四里　海上四十八里　森美作守

関大蔵

備前之内

岡山　四十二里陸海同　松平伊豫守

備中之内

庭瀬　四十六里陸海同　戸川土佐守

河辺　陸四十八里　海上五十四里　木下肥後守

備後之内

松山　五十八里海陸同

福山　五十九里陸海同　水野美作守

三好　七十五里　海上八十七里　浅野甲斐守

三原　浅野式部少輔

安藝之内

廣島　陸八十八里　海上八十二里　松平安藝守

周防之内

徳山　百十五里陸海同　毛利式部少輔

岩國　九十二里海陸同　松平長門守家臣　吉川監物

長門之内

長府　陸百廿九里　海上百三十里　毛利甲斐守

萩　陸百三十一里　海上　毛利刑部少輔

豊前之内

小倉　百三十五里　海上　松平長門守

中津　百四十八里　海上　小笠原遠江守

筑前之内

東蓮寺　百四十里アリ　陸海　小笠原修理大夫

秋月　百四十三里　黒田伊勢守

福岡　百八十里余　海上　黒田甲斐守

筑後之内

久留米　百五十七里　松平右衛門佐

柳川　百六十五里　海陸合テ　有馬中務大輔

三地　百六十六里　立花飛騨守

立花主膳

豊後之内

日出	百二十五里 海上	木下右衛門大夫
佐伯	百廿一里 夏ハ四国ヘ懸テ 百四十七里 冬ハ中国ヘカヽル	毛利主膳正
木付	百三十一里 海上	
府内	百三十二里 海上	松平對馬守
森	百三十五里 海上	久留島信濃守
竹田	百四十二里	中川佐渡守
臼杵	百四十四里	稲葉右京亮

肥前之内

萩	百六十里余 海陸共	鍋島加賀守
佐賀	百六十四里	松平丹後守
草津	百四十六里	鍋島和泉守
蓮池	百六十六里	鍋島摂津守
唐津	百七十五里	土井周防守
平戸	百九十二里	松浦肥前守
島原	百七十八里 海陸合テ	松原主殿頭
大村	二百二十五里	大村因幡守
長崎	二百二十里 海陸合テ	

深江 五島ノ内 五島佐渡守

宇土 肥後之内 百六十七里 細川丹後守

熊本 百七十里 細川越中守

八代 百七十九里 同家司長岡佐渡守

富岡 天草島ノ内ナリ 二百二十里 御蔵入 今井九右エ門支配

求摩 二百七十二里 相良遠江守

財部 日向之内 夏ハ四国ニ懸テ百五十里 冬ハ中国ニ懸テ百七十五里 秋月佐渡守

延岡 縣ノ 丁 夏ハ四国ニ懸テ百五十里 冬ハ中国ニ懸テ百七十里 三浦壹岐守

佐土原 夏ハ四国ニ懸テ百七十里 冬ハ中国ニ懸テ百九十二里 島津式部少輔

飫肥 二百十二里 伊東出雲守

鹿児島 薩摩之内 百九十六里 陸海合 松平大隅守

府中 對馬之内 二百三十七里 海上 宗對馬守

紀伊之内

和歌山　十六里　紀伊大納言殿
田辺　同家司　安藤帯刀
新宮　同断　水野土佐守
淡路之内
洲木　二十四里海上　松平淡路守家司　稲田修理守之
阿波之内
徳島　二十八里半　松平淡路守
讃岐之内
高松　四十八里海上　松平讃岐守
圓亀　五十二里海上　京極備中守
伊豫之内
今治　七十五里海上　松平美作守
喜多濵　七十五里海上
小松　七十八里海上　一柳山城守
松山　八十五里海上　松平隠岐守
大洲　九十五里海上　加藤出羽守
新谷　九十六里海上　加藤織部正
宇和島　百五十里海上　伊達遠江守

吉田　百四十七里　伊達宮内少輔

土佐之内

高知　百里余　松平土佐守

中村　百二十六里

西遊行嚢抄十五之下　二

凤村　是ハ住吉ヨリ堺ヘ行路ノ村ナリ

此所古歌ニ讀メル長居ノ里ナリ長居浦ハ頓テ此村ノ海辺ヲ云是モ住吉ノ内也

千載　霜さえてさ夜もなかゐの浦さむミ明やらぬにや千鳥なくらん　法印清賢

新後撰　打よする風吹生駒山の雲晴て長ゐの浦にすめる月影　為経

新千載　君か代ハなかゐの浦のさゝれ石乃岩ほとならむ末そ久しき　能経

同

おもひあまり立あかしつる住吉の浦にわかれて　崇徳院

堀河初

君か代ハ石井の浦にむれゐつゝたつも千とせを数へつる哉　肥後

續後

皇の住吉の池ハ神さひて住ける世ゝを知りて入らむ　常陸

夫木

明暮ていつもきゝなる時雨住吉の里の名をこそ頼みけれ　法印光寛

同

吹まゝに波風あらし住吉の浦の[illegible]　為家

同

住吉のきし[illegible]さ夜更て長居の浦の[illegible]浦　信実

同

住吉の浦のみるめも[illegible]　定家

那古ノ海　長居浦ノ海ヲ云　堺ノ方ニツヽキタル
那古ノ浦ナリ　越中ニ同名アリ

同

よみ人しらす

万七

住吉の岸の[illegible]　よみ人しらす

新古今

住の江の浦の海霧[illegible]　後徳大寺左大臣

古六帖

[illegible]住吉の浦[illegible]　行家

夫木　いく又鉢のなきさそ　きのふきて　霰ふりけりなこその浦松　為家

同　なこその海の塩干にみちぬれは　絶す打よする浪の松　具氏

同　霰ふる名こその濱田にまかれぬは　いつもさためぬ　むもひかん　為家

同　立帰る人をはなこその浜へよせはする浪

同　冬されは浦風寒て名こその浦の塩きにさやかに霰降　寂蓮法師

同　名こその海乃塩干乃かたに八重をれて　ちりし浮流鶴也

遠里小野　古歌ニハトヲ里ヲノトヨメリ　今里俗ハヲリ小野ト云自住吉近シ堺へ行本道ノ村ナリ

新勅撰　住吉の岸のむかひに霰ちる里の名もはるかに　覚延法師

続後撰　住吉乃松のあらしにひゝき来て遠里小野の秋風のふく　後徳大寺左大臣

続古今　こぬ人を待夜はあけて風寒く遠里小野の秋の夜の月　貞親

同　浪の音をしらす遠里小野の秋風にかきたえやらん　中務卿親王

同　忠平

後拾遺　ちるへき花ゆへ山里をさしてそ春の風のこゝろよ　仲敏

同　ふるさとは春こそその桜かり花の香こそかよひきぬらし

新後撰　見わたせは松の緑も霞けり春も里その春の曙　式乾門院御匣

同　吹よりの君かみすてゝき我宿は里小野の秋そなかなる　俊成女

後拾遺　みちとなる松の木かけは咲ととてさしもおほろ一言もかな　式乾門院御匣

同　秋の夕は草の里さへ哀れの風にて月そうつろふみの小野のみちも　花宗

後伏見院

新千載　藤の花も残るの萩の花袖よりつゆにほふ

同　墨染の里小野の花さきはのうきつゆのみ　よみ人不知

拾玉　山の里小野の秋の萩の風にうつり出ぬる恋しく　慈鎮

玉吟　秋風をそよきしも友は月日たつ里その松に恋　家隆

夫木　住吉の浦に花そせよん人ことひきを里その梅のさかり　公朝

為家

同　なほや蕨おりつん住吉の里をその妻の里人

同

同　あさくとまさて　あるのつかさこれ　あさかたの人の　つらさん
如願法師

同　住吉ハ浅沢をひろ　忘草さとのへかゝるハ
顕昭

同　難波かた浅香の浦のあさりせん人　うちよせ

同　夜つまやこまて　まきえをあさりけん浅沢小野のひきさえ
後鳥羽院　歌王

武蔵野よいそく　和泉の堺を流て中やうなとうみ
浅沢ハ今ハ以て浅沢小野をかく住吉の浦を
いふうて　ところ　付る
いふ浅沢ハ浅沢小野とかくそれまちのハ住吉のうら

味右衛門池　堺ニ近シ今池ト云モアリ

浅香　堺ノ町ニ入口ノ辺ヲ云

万葉二　夕されハ志ほみちきなん　住吉乃浅香の浦に玉もかりてな
行能

続後撰　住吉の浅香の浦のゝとをつけて　それのこかよちやえそあらん
雲雅

続千載　人心あさかの浦乃さ法にして　あさきこゝろもあひやあらん
内大臣

続後拾遺　契りこし浅香の浦にさゝ浪のなみやまつそ　人ハつれなれ

新千載　玉えるゝや　いくそ霧立すこの浦のまつの明石の　為相

新續古今　風ふしやゝ吹上はらしほ玉えるゝあまる浦の秋の初風　尹成

堺　自大坂到于此　三里　　　御領

此所ハ和泉摂津ノ境城也市中ニ大小路ト云町一筋アリ自是北ハ摂州南ハ泉州也

昔ヨリ富人ノ居所ニテ海陸ノ便地也江戸京大坂堺長崎是ヲ日本ノ五所ト云ト也南都　伏見　駿府次之

當所ハ自昔以ニ奉行人支配所也

後太平記曰新田武藏少将義宗脇屋右衛門佐義治ハ出羽ノ羽黒ノ麓ニ隠レ来幽閑ノ月日ヲ送ラレシニ其比南帝北帝御和睦ニシテケレハ義宗義治ハ忠ニモ義ニモ繋レタレハ猛虎ノ山ヲ失ヒ一ツ星ノ天ヲ離タルニ不異イサヤ廻国ニテ渡テ土居得能村上ト一手ニ成テ時ノ変ヲ伺ハントテ明徳三年正月二十一日夜ニ紛レ羽黒山ヲ出女性幼キ人々ヲ唱ヒ信濃路ヨリ和泉ノ堺ニ打越実ニテ般ニテ各取乗西海ニ赴キ遥ノ煙波ヲ凌キ備後鞆ニ著給ト云云

同書曰山名陸奥守氏清ハ紀伊和泉ノ西国ヲ賜リ和泉堺ニ城ヲ築キ武恩ニ誇リ安座シテ栄耀身ニ餘ル何ヲ以テカ報謝シ奉ラント思ヒケレハ明徳二年九月半ニ

将軍家ニ使者進セラ頃日漸ク紅葉モ且々色ヲアラハ
シ候定テ来月ハ宇治山ノ紅葉盛ナルヘク候為御遊覧
出御下シマサハ忝モ氏清饗膳勧盃奉ラント申上タリ
ケレハ大樹甚御感悦アリテ御遊ハ十月十一日ト定リ
已ニ其日ニ到ル供奉ノ大名細川右京大夫頼元畠山右
衛門佐基国今川上総介泰範一色刑部大輔義尹赤松上
総介義則佐々木治部大輔高詮其外近習外様ノ人々五
百余騎装束ヲ刷ヒ路次ノ行粧ヲ調ヘ善美ヲ尽シ馬ヲ
二行ニ立列子テ宇治ニ入給フ所ニ氏清称病不出會大
樹以之外ニ怒リ給供奉ノ大小名各無興無限是ハ山名
播磨守満幸昨晩堺ニ来リ氏清ニ謂曰去年逼討セラレ
シ山名宮内少輔時凞同右馬助氏幸京都ニ忍居テ氏清
ヲ七ニト嗷訴シテ山陰道ノ守ヲ賜ル明日宇治ヘ出給
フ一ハ思慮シ給ヘト申ス依之氏清忽ニ心変シ病ト称
シテ不出氏清遂ニ謀叛シ二条大宮ノ合戦ニ打負テ自
害セシト云ヘリ明徳記ニ委シ
応永六年十月大内左京権大夫義弘入道有繫挾邪心之子
関東通密謀率筑紫中国之兵着和泉堺遣使者召之不到
於是遣僧中津諭之不従
十一月前大樹義満自督諸軍到東寺進陣十八日遣使管領
畠山基国前管領斯波義将細川頼元等赴泉州義弘構城
築大倉井櫓以防之土岐宮内少輔詮直応義弘篭美濃長
森城使土岐美濃守頼益攻之上山名氏清之子某亦謀叛

於丹波京極五郎左衛門亦搆虚於近江各使兵攻之
十二月廿一日諸軍攻泉堺城焼之義弘力戦揮ニ長カ馳入
基国陣ニ与尾張守満家ノ子基国相撃義弘遂ニ死ス義弘ノ子大内新
介降参是日泉堺人家一万間焦土ト成

其比紀伊国ノ守護人畠山紀伊守高政ハ紀州ニ九阿瀬
川和哥山所々ニ城ヲ築テ大和和泉紀伊三ケ国ハ父祖
懸命ノ国ナレハ誰カ私領犯掠レトモ思細川カ権政ニ不
順然処ニ永禄三年二月下旬ニ三好筑前守実休義賢ハ三千余騎
ヲ率シテ和泉国岸ノ和田ノ城ヲ夥敷造作シ阿波国ノ
勢二千八百余騎ヲ笠ニ安宅摂津守冬康十河左衛門尉一
存ヲ以為城将令守之其処ハ堺浦ニ陣ヲ取ル去ル天
文癸巳年父筑前守元長畠山カ合戦ノ時顕本寺ニテ自
害シテ失シ海雲善室像ヲ拝ス然所ニ敵大勢岸和田
寄タリト告シカハ同名刑部少輔同右馬助岩成主税助
早渕頼母亮三千余騎ヲ属テ岸和田ニ差向十河左衛門
尉安宅摂津守ナ急雑ヲ令救其身ハ摂津ノ勢六千余騎
ヲ率シ同国久米田ニ討出三好左京大夫義継同彦次郎
長治十河孫太郎存保一宮長門守長正大西出雲守重元
海部三郎入道宗寿等ノ一族義ヲ一ニシテ敵ノ来ルヲ待
処ニ畠山紀伊守高政同宮内少輔同刑部大輔遊佐河内
守山木兵部大輔野口左衛門尉湯浅小次郎白井備後守
渡部藤左衛門太郎鈴木孫九郎同孫市七橋小平次平三
郎七郎的場七郎兵衛尉志貴十郎十市左近将監篠塚三

郎左衛門尉平一揆清水勘七田辺式部田丸兵部少輔伊
木五郎三郎田中掃部助龍門大膳宮崎東市正塩田豊前
守池田左衛門尉東條備前守神保神崎天方都合其勢二
万三千余騎三月五日ノ朝陽ヲ煙塵天躘上ニ推来ル三
好カ一族是ヲ見テ案ニ相違ノ大勢ナレハイカヽセン
ト周章騒所ニ城ハ不攻三好カ陣ニ押来ル一寸時海部入
道ハ筑前守カ妹聟ニテ日比武辺ノ者ナルカ我賢ニ向
テ敵大勢ニテ味方ハ少勢ナリ平場ノ合戦叶ニシ岸ノ
和田ノ城中ニ入テ安宅十河ト一手ニ成テ戦ハ敵ノ多
勢モ河ヲ恐レ城中ニ早ク可入給ト諫シカトモ我賢一
族評議區々ニテ時刻移ル其内ニ敵遠ニ押掛鎗ヲ合入
乱テ戦フ畠山カ先陣和泉国ノ住人臼井備後守甲掃

部助神保神崎田辺等二千余騎三好カ備ノ中ヲワリ縦
横ニモミ立シカハ三好忽戦河内国飯森ハ三好修理大
夫ノ城也

永禄十二年正月三日河内国若江城主三好左京太夫義
次カ方ヨリ早馬ヲ以テ将軍家ニ言上ス日今朔日四国
ヨリ三好山城入道笑岩泉州堺ノ津ニ着陣シテ其勢三
千騎ナリ三好日向守同下野守岩成主税松永弾正少弼
父子松山新入松謙ヲ堺ノ津ニ招キ寄テ笑岩カ曰各将
軍家ヘ降参スト云ヘ𪜈一旦ノ事ニコソアランニツラメ
前将軍光輝公ヲ正シク殺シ奉ル此一家ナリ急キ人数
ヲ集メ勢ヲソロヘントテ畿内ノ諸牢人ヲ招キ集ル中

ニ前美濃国ノ守護斎藤右兵衛大夫竜興同叔父長井隼人佐其外牢人ヲ集其勢五千騎ニテ六条本国寺ヘ押寄富将軍義昭ヲ討チ奉ランドテ上洛仕ルノ由ナリト江源武鑑ニアリ

織田家譜曰元亀元年四月信長尋泉堺富人名器古画

元亀三年七月義昭使日野大納言藤原某高倉宰相藤原永相伊勢伊勢守三淵大和守守二条御所而自指麾宇治真木島信長聞之出岐阜馳到江州佐和山而衆向所造之大船即赴坂本而放火於洛辺以近入二条妙覚寺即囲二条御所日野高倉等降参信長即発向真木島稲葉伊予守其子右京亮同彦六為先登太軍継之梶川弥三郎高盛先渡宇治河諸将進攻真木島大破之放火義昭力尽奔普賢寺譜衆曰願宥死信長不忍殺之顧佐久間信盛木下秀吉曰汝等能図之二人乃受旨送義昭経河州津田過尊延寺到河州若江城使細川六郎守護真木島城

和田伊賀守党子義昭而在摂州信長攻之一日下令日取和田頸者賞若干斬敵隊長者賞若干先登者賞若干摂州人中川瀬兵衛清秀見其掲示乃地斃取和田頸者衆皆怪驚清秀還家祈念既而臨戦場以伺和田所在而不能知也忽有山伏一人来清秀問曰敵将何在答曰在彼曰其鬚如何曰物色如彼於是清秀指其道而行即見和田熟察物色果然急撃之遂獲和田首（和田者江州甲賀人来任摂州信長使荒木摂津守居摂州中川属之）

義昭党渡辺宮内少輔降義昭又到泉堺入紀州

天正元年十一月十日信長上洛発向河州攻三好左京太
夫義継（或作継）十六日義継自殺三好氏其先甲州源氏小笠
原之流也自甲州移信州小笠原長清次男孫二郎長房為
阿州守護其子孫号阿波小笠原足利氏之有天下時細川
氏領四国故属其旗下長房八代信濃守義長住阿州三好
邑以為称号其後京都柳営式微細川執兵権及于細川微
弱而三好氏雖為信臣専国政義長孫筑前守長輝振威
八年乱入京師於百万遍寺自害三男長光五男芥川長則
同死長輝長子下総守長秀揚勢三年与其弟頼澄於勢州
山田自害長輝二男薩摩守長基振威五年於泉堺顕本寺
自盃長基長子筑前守長慶撃殺其叔父宗三而陥京師
逐細川晴元幽之於芥川於是長慶代細川執幾内近国兵
權廿五年居河州飯盛城改号修理太夫蔑視柳営長子筑
前守義興（或作義長）代長慶執権四年為家老松永弾正忠久秀
被毒殺而死（長慶義長事跡詳義晴義輝譜中）義継者義興弟也或曰十河
一存子也及義興死而久秀立之以為長慶継嗣淡州宅木
野口阿波一宮井沢讃岐十河皆三好一族也長慶弟豊
前守之虎号実休其弟摂津守冬康続安宅木家其弟一存
続十河家其弟冬長続野口家其餘氏族山城守下野守日
向守等皆張臂于世永禄八年義継与久秀相謀使日向守
下野守松永右衛門佐久通（久秀子）弑将軍義輝由是三好松
永弥専横四年及信長之起而兵威日衰至是義継亡
天正六年四月九鬼右馬允嘉隆受信長命而率大船数十
艘自伊勢海轉漕以到紀州熊野浦与雑賀賊船戦破之取

敵船三十餘艘以著泉堺之浦為塞大坂往來之舟路故也
九月信長上洛聞越中一揆起而使斉藤新五撃平之信
長赴住吉放鷹於安信野十月朔日召九鬼嘉隆覧被大
船而動喜色且使嘉隆試為舟師之形勢賜黄金衣服酒肴
於嘉隆信長枉駕於泉堺今井宗久茶亭且過宗易宗及
道叱等茶店又遊佐久間甚九郎茶屋
天正十年四月十五日
大權現到安土謁信長々々豫命奉行人修路次船橋旅館以
待之穴山梅雪奉從之及著安土而館於大寶坊信長使明
智日向守光秀餐応之光秀俄搆假屋造既以金銀飾餐膳
治具甚備時會羽柴秀吉在備中与毛利輝元對陣乞援兵
於信長々々使池田信輝父子明智光秀長岡与一郎忠興
高山右近中川瀬兵衛塩川吉大夫等赴其采地以成軍用
而救秀吉也信長使別人代光秀餐応
大權現光秀怒而以其所調之餐膳器具等弃捨湖水先是那波和泉守斉藤内蔵助去稲葉伊予入道一鉄而仕光秀々々善遇之以為家人一鉄怒於信判与光秀相訟信長令光秀使和泉返送於一鉄而使内蔵助自殺時猪子兵助為光秀執申和之故内蔵助免死事光秀如元然信長怒光秀背法以召之譴責而手自打光秀頭者至二三也光秀銜之
十九日信長於安土惣見寺慰
大權現召舞太夫幸若某猿樂太夫梅若以見聞焉
大權現家臣坐于棧敷穴山梅雪等伺候焉
廿日信長招
大權現於高雲寺館有餐応信長自配膳至于梅雪又
大權現之家臣數輩信長手賜有薮而後信長挽

大権現御手以登殿守歴覧之而返本座及夜退去
廿一日
大権現発安土為周覧洛中且遊泉堺也信長以長谷川竹副
之以為案内者
廿六日明智日向守光秀発坂本而赴丹波入亀山城
廿七日光秀到愛宕山一宿西坊廿八日召紹巴等与行
連歌因有祈願之事也座中光秀卒尒曰本能寺堀深哉
多乎又喫粽不及脱其包葉既而帰亀山夜光秀宿愛宕時終夜不寐深慮而不覚有歎声紹巴怪問之光秀大叱之
廿九日信長使兵士留守安土而僅卒近習百五六十人
入洛假居本能寺信忠在妙覚寺使群士各帰国以待中西
国発向之令

六月朔日夜明智光秀在亀山城密召明智左馬助濃州人本号三宅弥平次同次右衛門藤田｜藤三存友内蔵助利三溝尾勝
兵衛曰卿等為我死乎若不然則速斬我頭左馬助曰唯命
是従耳光秀曰我為信長欲被殺也不如成大事也内蔵助
曰不可也左馬助曰駟不及舌事必発覚唯急入洛則大
事成矣光秀即卒兵発亀山令曰明朝入洛可使信長見我
軍粧及到大江山士卒怪問其所進光秀曰敵在本能寺於
是衆始知其有叛心光秀馳行二日黎明光秀入洛急囲本
能寺信長驚キ問曰叛者ハ誰哉森蘭丸出望之曰光秀
也乃使蘭丸等防之光秀急攻之蘭丸及其弟力丸坊丸并
宿直者戦死信長放火テ自盃時年四十九歳光秀尋信
長屍不得之故甚不楽斎藤内蔵助求信長焦衣以示

光秀々々猶訝焉信忠出妙覚寺欲到本能寺見其煙以知
信長已薨馳入二條御所使村井春長軒奉親王及若宮以
赴禁中衆皆謂早々帰安土集兵士以可討賊也信忠曰
彼必不可置兵於宇治勢多則我死於路中乎不知死於斯
也春長軒等皆曰誠如君命也在洛群士稍集亭午光秀
来囲二條御所信忠防之光秀使兵登御所隣屋上而直
下御所発矢放鉄炮御所兵多死信忠遂自殺時年二十
八織田源三郎等一族及村井春長軒福富平左衛門菅
屋九右衛門團平八等四十餘輩同死前田玄以受信忠遺
命而赴岐阜奉信忠子三法師以到清洲
大権現聞変欲以単騎討光秀然納家臣諫乃発自泉堺早帰
本州

逍遥院殿高野紀行にいはく　堺光明院にて
出て侍りしにいつつきてあそばれし侍る事なり
言ふ事しらハ申して参らせし事の給ひし夕つかたそ
人の寄宿のあるじ侍る事侍り十日ハ光明院にて
旅宿とせ　招請して　饗をうけ侍る
廿二日高野より金剛のもとへひきて宗瑚にも
とゞまりし人ゝあまのこそ侍り立侍り
日紀行 此後行　着侍廿日まで　此方　堺よりこえ如
此亭ハすこしうち寄て侍る所也ハ宗仲が宿なく
一盃をつくし侍りき廿八日ハ顕本院に參く　招請あり
かハ海を見ひて大師の清水の弁才天の社に詣
参りさきあらたまつる文学の風景よりいへ

一 此ほと堺の浜見やりて光明院にまかりしかは
宗璞宗か侍て まて 帰京の後のことし申て
のへめりしか侍しかはしはしありし
此次 高野参詣の前より 此堂をとゝめてかへり
しを当人参籠まて まかあへきよし侍し
かりしこそ侍りし 侍りしに 宗牧にあひて手具
りさりし

旅泊附句
いさりひて 船のつなに 葦花さえハまかりし時なれは

江上眺望
さなえ入江の船ともなるとさひしきとそのことく
宗牧述

高野にまうてこころあり山寺に 我をとらひて寄にきや
三月朔 光隆と いふ人の連歌興行すへきよし
さうにて侍りしかは光明院にて一座侍りしに

河路
浜松の花のやここえし 郭公 覚空
みしらぬ波 花しく浦のまとゝ 杜丹花
浪にそ残光の月に林きらく 宗碩

二日堺をたちて和泉

一 和泉ヨリ堺ニ到ル道路ノ了ハ南遊行嚢抄ニ粗記ス
何モ河內ヲ經テ大和ノ国ニ入信貴越金剛山越雁上大
子越高天越ナト路節多シ

信貴越ニハ八尾ヲ経テ行

八尾

称名院右府紀行にいはく河内国八尾木の合別
蓮華寺にやどりて侍りけり
十一日天文九年三月あすは信貴へと思ひ侍りけるに
ある人のいふやう此八尾といふところは常光寺名木
なるよしの八尾十三ねんをさなりてこの木のは
八尾ともいふとかや続きていてはりしかば
其おもそこにまうでむとてひたすらの八尾の梢子もその木
ちゝ大ところこれより輪山へてむくの木のあたり尋よりひ
里てらの井木のもとより彼にたちよりて太子の御朝
閑居はおはしけるとて案内しけるに人まひなる
あまて勤ける
へそをとくとそかゝりてむくの木のむくつろきてもよおかり

絹巴

いにしへのあとをたつねてみつきおのつからなるむかしもむつましきなれ
とぞ

此椋木ハ聖徳太子ノ守屋ト戦ヒ給シトキ守屋軍強
クシテ太子ノ兵敗績ス守屋ノ兵競来リシ時太子椋
木ノ虚ノ中ニ隠テ其難ヲ遁レ給ヒ遂ニ守屋ヲ退治
シ給ト云ヽ此事ハ太子傳又ハ源平盛衰記ニ見エ

高安里　是モ信貴越ノ路ニアリ竜田越モ此路也

伊勢物語にいはくむかしかうちに女おやなくたよ
りなくなるままにもろともにいふかひなくてあらんやは
とてかうちのくにたかやすのこほりにいきかよふところ
いてきにけりさりけれとこのもとの女あしとおもへる
けしきもなくていたしやりけれはおとこことこころありて
かかるにやあらんとおもひうたかひてせんさいの中に
かくれゐてかうちへいぬるかほにてみれはこの女いとよう
けさうしてうちなかめて
風ふけはおきつしら波立田山よはにや君かひとりこゆらん
とよみけるをききてかきりなくかなしとおもひてかうちへも
いかすなりにけりまれまれかのたかやすにきてみれは
はしめこそ心にくくもつくりけれいまはうちとけて
てつからいひかひとりてけこのうつはものにもりけるを
みて心うかりていかすなりにけりさりけれはかの
女やまとのかたをみやりて
君かあたりみつつををらんいこま山くもなかくしそあめはふるとも
といひてみいたすにからうしてやまと人こんといへり
よろこひてまつにたひたひすきぬれは
君こむといひし夜ことにすきぬれはたのまぬものの恋ひつつそふる
といひけれとおとこすますなりにけり

高安名所ナリ　里　寺　立田山　伊駒山　家子のうつは
掛衣なとよめり

新葉　跡思ひ河内のためしにあの里ハあめのふしちるところへよ　河一首

赤坂

千劔城　金剛山　信貴越ノ路也

大平記曰元弘元年河内国赤坂ノ城ニハ楠正成築城ス東勢三十万騎ニテ攻之城兵ハ七百余騎也赤坂ノ城下ト申ハ東一方ヨリ山田ノ畔重々ニ高クサシ難所ノヤウナレ三方ハ平地ニ続タル塀一重塗テ俄ニ拵タル城ナレ共廿日許ハ怺テケリ城中終ニ兵粮尽ケレハ諸卒カノ落スサキニ落ントテ雨風ノ夜ヲ得テ城中ニ穴ヲホリ死タル骸ヲ入テ其ニ火ヲカケヨト云置テ正成城ヲ出テ廿四町延テ願レハ約束ノ如ク火ヲ焼上タリト云

石川々原　吐田　赤坂ノ辺ニ

太平記ニ委シ

同二年正成去年赤坂ノ城ニテ自害シタル真似ヲシテ落タリシヲ誠ト思ヒ其跡ニ湯浅孫六入道成佛ヲ地ストシテラキタリシヲ同四月三日楠五百余騎ニテ俄ニ湯浅カ城ヘ押寄テ攻之城中ニ粮ヲカリケレハ湯浅カ所領紀伊ノ国ノ阿瀬川ヨリ人夫五六百人ニ兵粮モタセ夜中ニ城ヘ入レントス楠是ヲホノカニ聞切所ヘ兵ハ

ヲ出シ悉ク兵粮ヲ奪取其俵ニ物具ヲ入馬ニ負セテ城
中ニ紛入内外ヨリ攻之湯浅可戦ヤウナケレハ首ヲ延
テ降参ス楠其勢ヲ合テ七百余騎和泉河内ノ両国ヲナ
ヒケ大勢ニ成ニケリト云ヘ 太平記ニ委シ
足利殿兄弟御中悪クナリテ恵源禅門吉野殿ト御合体
アリテ恵源禅門観應元年大和国越知カ峠ニ御座アリ
ケレハ無二ノ将軍方ニテ楠為退治石川々原ニ向城ヲ
取テ居タリシ畠山阿波将監国清モ其勢千余騎ニテ越
知峠ニ馳参ト云ヘ
延文四年十二月廿日畠山大夫入道世方七千餘騎ヲ引
卒シテ上洛シ吉野殿ヲ攻ヘキ由聞エ其比吉野ノ新帝
ハ河内ノ天野ト云所ヲ皇居トシテ御座アリケルヲ和
田楠皇居ニ参テ此所ハアマリニアサマナル所ニテ候
ヘシトテ金剛山ノ奥観心寺ト申所ヘ御座ヲ移シ正儀正武
等ハ和泉河内ノ勢ヲ相伴ヒ千劔金剛山ニ引篭リ龍山
石川辺ニ懸出ニ日々夜々ニ相戦ヒ湯浅山本恩地贄川
野上ノ兵共ハ紀伊国ノ守護代塩治中務ニ付テ竜門山
最初ノ峯ニ陣ヲ張セ紀伊川尭辺ニ野伏ヲ出シ闘合攻
合息ヲモ継サス戦ハヽ極テ短気ナル坂東勢モ退屈セ
テ候ヘキ退屈メ引返ス程ナラハ勝ニ乗テ追蒐敵ヲ千
里カ外ニ追散シ御運ヲ一時ニ可開是庶幾スル所ノ合
戦ナリトヽモナケニ申ケレハ主上ヲ始ヘイラセミナ
タノモシキ事ニソ思召レケル主上頓テ観心寺ニ皇居

ヲウツサル
延文五年五月三日平岩ノ城落ルヿ同八日赤坂ノ城ヨリ和田夜ニ紛レ出ルヿ和田楠赤坂ノ城ヲ焼テ金剛山ノ奥ヘ入ヿ此後寄手京ヘ引返ス事
右何モ太平記ニ委シ

剛林寺

堺ヨリ河内ヘ越テ葛城越ノ路ノ名所旧跡
當寺ハ藤井給子ノ建立ナル故ニ藤井寺ト本尊観音五間四面ノ堂内ニ安置ス昔ハ大伽藍ニテアリシトナリ礎所々ニ残テアリ順礼ノ札所也

楠正行此寺ニ陣シテ戦シヿ藤井寺合戦トテ太平記ニアリ
貞和四年八月十四日ノ午刻ニ細川陸奥守顕氏三千餘騎ニテ藤井寺ニ馳着タリ是ヨリ楠カ館ヘハ七里ヲ隔タレハ軍ハ明日カ明後日ト思テ油断シタル所ニ誉田ノ八幡宮ノ後ナル山陰ニ菊水ノ旗ヲ打寄合戦メ楠大利ヲ得寄手大ニ敗走シテ天王寺ニテ引返リト云々
太平記ニ委シ

或記にいはく葛井寺はいにしへ乃明寺ともいへハ西乃方二十町ばかり行て門ありその内松原ありて中ほとへ町ばかり行て當寺四面に観音堂あり剛林寺といふ葛

井給子乃建立なり一條よりて葛井寺と以ふ
むかしハ大寺にてありしにや石すゑのこりて多く
また河内楠正行の寺に籠居せしそのうちのことみえ
るて和泉の境にちかきところ

道明寺　尼寺ナリ藤井寺ヨリ到テ此ニ十餘町
當寺ハ天満宮ノ御娘ノ開基ナリ

天満宮
南ノ大門ノ東西ニ蓮池アリ門ヲ入テ梅ノ双木アリ其
カ中ヲ一町計北ヘ行テ半町東ヘ折テ行ハ五間ニ三間
ノ拝殿アリ三間ノ廊ニ續テ其末ニ二間ノ石壇ヲノホ
リテ天神ノ御社アリ三間四面也華表ハ御階ノ前ニ立
タリ石壇ヲ東ヘ下レハ末社二社アリ大門ノ松原ノ東
ニ三間ニ二十五間ノ尾屋アリ尼ノ住所也

譽田八幡宮　樓門南北ニアリ三間ニ十五間ノ回廊有
本社ハ九尺間三間東向也北ニ若宮双テ五間ニ二間ノ
神樂堂アリ南ニ末社二社北ニ一社西ニ三間四面ノ御
輿舎アリ鐘樓ノ次ニ五間四面ノ釈迦堂舞臺楽屋並テ
神前ニアリ御供所西ニアリ本地堂ハ本社ヨリ一町北
ニアリ其間ノ皆坊舎ナリ御陵ノ山ハ本地堂ノ北ニア
リ

神社考曰　誉田

日本紀第十誉田天皇足仲彦天皇第四子也母曰氣長足姫尊天皇以皇后討新羅之年歳次庚辰冬十二月生於筑紫蚊田幼而聰達玄監深遠動容進止聖表有異焉皇太后摂政之三年立為皇太子時年三歳　初天皇在孕而天神地祇授三韓既産之宍生腕上其形如鞆是肖皇太后為雄装之負鞆肖此云阿叡故称其名謂誉田天皇　一云初天皇為太子行于越国拝祭角鹿笥飯大神時大神與太子名相易故号大神曰去来紗別神太子名誉田別尊然則可謂大神本名誉田別神太子元名去来紗別尊然無所見也未詳

二十二年三月幸難波居大隅宮

四十一年二月天皇崩于明宮年百十歳　一曰崩于大隅宮

神皇正統記云應神天皇本名誉田天皇又號曰胎中天皇居于大和軽島豊明宮

誉田宗廟縁起曰應神帝葬于河内国旧市郡長野山欽明帝始所造廟而有行幸聖徳太子亦有参詣

役行者将入唐詣誉田社神造曰蓬莱之業不害無益崑崙之王不琢不宝於是行者赴唐入崑崙山仙窟行基詣此社祈立寺院

空海率諸徒祈雨于社辺池善女竜王及八竜王悉現形而滂沱天長年中也

菅家相詣此祠祈七日童子忽来授宝劔于菅丞相不幾仕讃岐守仁和年中也

後冷泉院御宇新造宮社去本所一町余有行幸ト云

戎記引はいそく欽明天皇膝く濤富とあり象流
里く引寺あ里しより誉田の八幡宮とあかなく
丞なるてより里の名を誉田といひそのされば古野の里
といひしとそ
太平記ニ此所ニテ楠カヿアリ
旧塁ニ誉田ニアリ

後太平記曰
明應二年畠山右衛門佐義就ノ長子弾正忠義豊ヲ為誅
罰将軍義植公河内礬誉田ニ発向相従フ人々執事左衛
門督政長同尾張守尚順細川右京太夫政元朝倉左金吾
貞景富樫介政親都合其勢三万余騎明應二年二月二日

京ヲ立テ河内国正覚寺ニ陣ヲトリ畠山弾正忠義豊カ
籠タル誉田城ヲ攻義豊智畧ヲ廻シ前管領細川右京大
夫政元ノ陣ヘ密ニ使ヲ以欺キケルハ父義就ト政長ト
兄弟家督ノ論ニヨリ山名細川両家應仁ノ大乱既ニ起
レリ然ルニ父義就カ罪科ヲハ前将軍ノ蒙御赦免只今
義豊御征討イカナル重科ニテ其罪三代ニ及候哉其故
ハ同罪タリシ政長還テ天下ノ権柄ヲトリ且ハ山名細
川両家モ罪科ナカリシニテ亡父義就独滅亡ノ跡ニテモ御
憤残リ候ヿハ何ソヤ已ニ當家ノ怨敵タリシ赤松満祐
カ子孫ヲタニモ御宥許アリシヿモ不遠况御代逆ニ阻
リ御子孫ニ傳テ可被罰罪科更ニ難心得候是偏ニ讒佞
道ニ横リ角成果候ヿ無念ノ至不過之此上ハ貴殿ノ扶

助ニアラスシテイカニテカ横死ヲ免レン只御憐愍ノ外
無他候再三申遣シケレハ政元實ニモ理ト思召聴ニ及
シカモ執事曽テ無許容依之政元大ニ怒リ義豊ニ一味
ス去ル應仁ノ乱ニハ政元ノ父勝元政長ニ一味シ義就
ヲ敵トシ今又義豊ニ一味シ政長ヲ敵トス君臣共ニ轉
変スル事掌ヲ返スカ如シウタテカリシ世中也去程ニ同
月廿三日政元忽飛テ大勢ヲ卒シ義豊政元サキニ進ヲス
正覚寺ニ押寄関ヲ嗔ト挙ケ将軍ヲ攻撃事急ナリ寺内
ニハ曽思寄サル事ナレハ周章騒事無限管領畠山左衛門
督政長自敵ニ相當挑剋事度々ニメ終ニ討レ其外大勢
討死ス将軍モ大庭ニ出テ戦給トイヘトモ術尽テ寺内ノ觀
音ノ畫師ニ入テ暫忍ヒ玉シニ終ニ捜シ出サレテノトウ

ハレ人トナリ物部紀伊守カ館ニ移シ進セ数多番人ヲ
サシ置用心密ニシタシテ押籠ヲキ奉ル然ルニ上野民ア
太輔伊勢左京亮廣戸ノ刑アツ浦或夜潜ニ来テ宿直シケ
ル次ニ密謀メ物部カ彼官二人ヲ語ヒ同六月四日物部
カ館ヲ忍出給ヒ上部伊勢廣戸御供シテ山伏ノ姿トナ
リ北国ニ趣キ給シカ折シモ加賀能登越中モ私ノ鉾楯
ノ最中ナレハ可頼方モナク美濃ニ廻リ伊勢路ヲヘテ
摂州難波ヨリ船ニ乗テ伊予国ニ渡リ給ト云々

飛鳥川 是ハ河内ノ内大和ノ境ナリ葛城高天ニ近シ
淵ハ瀬ニト読ルハ此所ナリ和州河内両所ニ
アル事和州ノ飛鳥川ノ条下ニモ書之大和ハ遊向ノ罡

ニアリ溝川ニテ淵瀬ノ沙汰ニハ不及小流也

古今　あすか川ふちハせになる世なりとも思ひそめてん人ハ忘れし　よみ人しらす

同　世中ハなにか常なるあすか川きのふのふちそけふハせになる　よみ人しらす

同　あすか川ふちにもあらぬ我宿もせにかはりゆく物にそありける　伊勢

後撰　昨日のせハ淵とありけし　あすか川きのふのふちそ我身なりける　元方

同　ふちハせになりかはるてふ飛鳥川わたりみてこそしるへかりけれ　伊勢

同　いたつらに身をそなけつる飛鳥川淵むなしくて

返し

同　飛鳥川せきてとゝむるものならはふちせになると何かいはせん　源大臣

同　飛鳥川心のうちになかれてハそこのしからみいつかよとまん　よみ人しらす

同　あすか川かはる身ひとつのうき世かハ人の心の世ハ淵となる

同　あすか川ふちせにかはる心とハみなかみしもの人もいふなる　伊勢

拾遺　飛鳥川しからみわたしせかませハなかるゝ水ものとけからまし　人丸

後撰 あすからやさらに世中ハ成けり飛鳥川 あさき瀬にそくるゝ世とハ

人丸

新古今 飛鳥川もみち葉なかるかつらきの山の秋風吹そしくらし

長方

同 あすか川せゝになみよるもみち葉やかつらき山のこからしの風

寂蓮法師

同 定めなき名にハ立とも飛鳥川もみち流しせゝそなかれ

新勅撰 飛鳥川かはらぬあすかせゝの淵のとせくさきも淵の名にて

高遠

同 あすか川昔の瀬世もいかならんさらぬ淵ハ法神もなし

重家

續後撰 六月のまつりす晦れハあすか川さらにみなともくる

為経

同 流れゆくせゝにも飛鳥川秋のみちかたの恋

西園寺入道

同 飛鳥川かはらせぬ底にたえ分れゆく人な

親王

續古今 月日のつもりし浪ハ飛鳥川おなし淵よそになる世

良経

同 昔かせそのさてこれならめあすか川流れてかはる浪の音

後鳥羽院

同 世中ハいつまて飛鳥川こそ今日のあさせに

光俊

同　あすかハ世ゝらかうとこなれと　飛鳥川むかしハふちてこそかきし　公誉

従遊　飛鳥川かすしかれのとかなりせは世ハさためなきことこそなけれ　雅純

玉葉　あすかハせゝらかうこのふちハかはらぬ水の淵をはさまれ

讃義　昔よりふかきを世にも飛鳥川かはせや人のかはりなん　貞宣

風雅　飛鳥川ひとつなかれや世のうき七瀬の後のすみかありける　公雄

同又　おもひつゝかれて我むへきとあれハ飛鳥川かはそせよあすへきてまとかき　忠俊

新義　あすかハせゝらかりときし飛鳥川あすかの淵も月影ともかり

同　月影もてる夜さらまし飛鳥川いつよりのかはまたはかりなん　公雄

新続遠　照やて日影の月影飛鳥川淵ハせゝなるひとやかはらん　具訪

同　あすかハせゝらかりかひも飛鳥川かはるほとのなき月影　一条内府

同　あふせもあやかれさけすゝき秋や芦葉もとをつらきこゝろ　道房

同　飛鳥川あはれのあすかせにとはぬみちよりの飛鳥川　一条左大臣女

孝綸

新後撰 五月雨のみかさまされハ飛鳥川きのふのわたりをあさせなりけり
實有九条

同 飛鳥川あすさへけふハ淵ならハよるせもなしや五月雨のころ
紀記人郷氏

同 流ゆく日数も早き飛鳥川かはる淵やきのふの瀬
家隆

新後拾遺 あすか川思ひしにかはらぬはきのふの山さへ名のみにて
為季

同 飛鳥川かはりつゝなる淵瀬をもうき世の中におもひよせしを
成光

同 あすか川たかき瀬をいかにてうつるとも人の心ハかはらさらなん
右近

同 きのふこそ瀬とはいふなれけふハ飛鳥川あすや淵のかはるならし

武紀行 はるくとうつる山こえて淵しゆきて清
のたまふみつれ紀遊はいさゝかゆるく見えて川瀬も見へ
飛鳥川とそれその渕をはにかよふ星をあすか星とか
その川のひろさ十間餘もなかつかし川とふ名に
名ひく世に渕せともかはりていつかさては今の渕
も瀬となれは世にはかなきしるしとはかはりてあくる
瀬の紫ハあかつき川な淵ハ飛鳥川淵気もなしかなし
うつゝくはとにかくふしハにこりにかはる繁飛鳥川ハ
大和の国内高市郡にありてにあかしその
ほとりに中比にひけ

飛鳥川あすは淵ともなりぬへし昔のあさせはいかにかはらむ

飛鳥ヨリハ信貴越ニモ金剛山越ニモ葛城越ニモ行ク
南遊行嚢抄ニ和泉ノ支委細ニ記之仍畧之
右堺ヨリ河州路大概ヲ記之此頃次第未経歴或人ノ書ヲ以テ書之猶追而可加之而已

追分 在堺市中自是右ニ越キ石津ノ駅ニ出ルハ紀州和歌山ノ路也左ノ街ニ入テ茂津野ニ出ルハ高野路ナリ

石津 自堺到于此一里

此所ハ海辺ニテ海陸ノ便地也此辺ノ沖ヲ和泉ノ灘ト云四国ヘモ紀州熊野浦ヲヘテ伊勢海ヘ廻ル船モ皆此沖ヲ乗ル

紀貫之土佐日記にいはく 卅日 月 雨風ふかす海賊は夜ありきせさなりときゝて夜中はかりに船をいたして阿波の水門をわたる夜中なれは西東もみえす男女からく神仏をいのりてこの水門をわたりぬとらうのときはかりにぬしまといふ所をすきて多奈川といふ所をわたるからくいそきて和泉

いたりぬ けふ海になみに似たるものなし 神仏のめくみ
蒙れるに似たり 今日船にのりし日よりかそふれは三十日
あまり九日になりにけり 今は和泉の国にきぬれは
海賊ものならす
二月朔日朝のまあめふる 午時はかりにやみぬれは
いつみのなたといふ所より出てこきゆく 海のうへ昨日のやうに
風なみみえす 黒崎の松原をへてゆく 所の名はくろく
松の色は青く 磯の波は雪のことく 貝の色は蘇枋
に五色にいま一色そたらぬ このあひたに けふは箱の浦と
いふ所より綱手ひきてゆく かくゆくあひたにある人の
よめる
玉くしけはこの浦なみたゝぬ日は海をかゝみとたれかみさらん

又舟君のいはく この月まてなりぬることとなけきて
くるしきにたえすして人もいふこととて心やりに
いへる
引舟のつなての長き春の日を四十日五十日まてわれはへにけり
きく人のおもへるやう なそたゝことなると ひそかに
いふへし 舟君のからくひねりいたしてよしとおもへる
ことをゑんしもこそしたへとて つゝめきてやみぬ
ねてなれはさほとまりぬ
二日雨風やます 日一日終夜神仏をいのる
三日海の上きのふのやうなれは 船いたさす 風のふくこと
やまねは きしのなみたちかへる これにつけてもよめる
緒をよりてかひなきものはおちつもる涙の玉を

ぬぬなりけりかくてけふハくれぬ
四日かちとりけふ風雲のけしきはなはたあしといひて
船いたさすなりぬしかれとも終日に浪風たゝす
このかちとりハ日もえはからぬかたゐなりけりこの
とまりのはまにハくさ〳〵のうるはしき貝石なと多
かりかゝれハたゝむかしの人をのみこひつゝ船なる人の
よめる歌
よするなみうちもよせなむ我こふる人わすれかひ
おりてひろはむといへれハある人のたへすして舟の心
やりによめる
わすれ貝ひろひしもせし白玉をこふるをたにもかたみとおもは
むとなむいへる女児のためにハ親をさな
くなりぬへし玉ならすもありけむをと人いはむや
されとも死し子かほよかりきといふやうもあり
なほ同し所に日をふることをなけきてある女のよめる
手をひてゝさむさもしらぬ泉にそくむとハなしに日
ころへにける
五日けふからくしていつみのなたより小津のとまりをおふ
松原めもはる〳〵なりかれこれくるしけれハよめる
ゆけとなほゆきやられぬハいもかうむをつのうらなる
きしの松原かくいひつゝくるほとに船とくこけ日のよきに
ともよほせハかちとり船子ともにいはく
御船より仰たふなり朝北の出こぬさきに綱手はや
引といふこのことはの歌のやうなるハかちとりのおのつから

のほりけるとらハとらのこくなり　我かのゝかたなるを
いふにそほれけれはゆくへのあやしとおもひやりてそわひ
つゝゆきてたよりにせし色ハ　あかて二十文字ほとなりけり
けれあかしのあれかしとて人をしるへに　いのちをもたゝ
しけるに　風波にあらはれ　いつしかのりわたるおもひのうちあ
そこに如何京せんちやうまゝことひのことをうけてほとけ
いのちあかし　家
いのちあかしの海とおもふにあはれなることもいとふかくて
なをこゝろにしみてたちはなれかたきいのち
松原かりしろくて　浪の上にしく　小畠

多戸賀村

春木村

岸和田　自石津到于此　三里　城主　岡部美濃守

城ハ通町ノ北ニアリ　此所ハ海陸ノ便地ニテ諸色自由ナル所也

當城不知権輿慶長年中小出播广守秀政領之分限三万石

慶長九年　全高　小出大和守吉政

後号播广守外但刕出石城吉政嫡子吉英領之

同十八年　五万石　小出大和守吉英

初名右京太夫高ノ内　二万石ハ但刕岩石ニテ領之

元和五年　六万石　松平周防守康重
轉丹刕笹山　移當城内一万石ハ後検地高
寛永十七年　六万石　岡部美濃守宣勝
轉摂刕高槻移當城
寛文元年　五万三千石　岡部内膳正行隆
外五千石同主税助三千石阿波守豊明配分　家督ノ時
貞享二年　全高　岡部美濃守宣就

海塚　海濱ノ村也自岸和田到于此半里是モ駅也
直ニ佐野ヘ通スルモアリ

海塚堂
此堂ハ村ノ南ニアリ来歴可尋之

佐野　自岸和田到于此一里　岸和田領
自海塚到于此半里
此所モ海辺ナリ或ハ佐野市場トモ云
天満宮　是ハ佐野ヨリ安松ヘ行濱辺ノ松原ノ内ニア
リ此辺高師ノ濱也摂津ニ同名アリ大伴ノ
高師ノ濱トヨメルハ摂刕也

古今　沖つなミ高師の濱乃濱松の名にこそ君をまちわたりつれ
貫之

金葉　音にきく高しの濱のあたなミハかけしや袖のぬれもこそすれ
一宮紀伊

雑

濱寒み浪風よ寒さむらし沖つなミ高師の濱に千鳥なくなり　定家

同　おきつなミ高師の濱の濱松の名にこそありけれ我恋ぬるハ　為家

秋の夜の高師の濱の沖つ風さそふにつけてなミにまかする(?)　後京極攝政

同　おきつなミよする高師の濱松の名にはたてども人こそつれなき　慈源法師

秋遠き(?)おきつなミ高師の濱の濱松に塩風よ寒さむらしなくなる　内裏名所百首　家隆

たかさこの高師の浦のおもひより桜狩にあらはれ

家集に　おきつ風なミもあらき浦の高松の木陰ハ世とも吟く　順徳院

泊船ならぬ事と　為頼

家集に又高師の濱にてハ(?)世にしきハ一村松さらぬ白雪

逍遥院　夜高野紀行に　いさく(?)なる　高野に参詣のさ思ひ立て宗治といふもの誘ひて道の程にて(?)はかなきみつ哉(?)浦つたへ　さらにふかきぞ(?)撰たく(?)すくなる秘事のさりに見る(?)ともなく(?)ゆくさきの事のまにまにいつも(?)なるに(?)ハ霞(?)に

かの紀行に海路をゆくとていふところのすこしみちまうへいらんとて宗師を下して紀の中にもよこしまのあとさそのくまをめくりて高師の松原の下天神の社のまへにとて
　神のうへに松吹風や打よする高師の浜のあさなみ

蟻通明神　自路少東ニアリ高師ノ松原ノ内也

神社考曰
昔未詳何時世唐将擊我邦試贈七曲玉環上下内通且告曰以縄貫此玉衆人不知所為于時有中将某取蟻繋細糸其腰以蜜塗環孔口而入蟻々聞蜜香遂得通入而出於是以其糸所貫玉環還于唐々人驚曰日本国人其賢哉遂不肯攻我朝其中将進至大臣位死而為神有人詣其社夜夢告歌
　那々和多尓磨我戻留他磨乃緒々奴幾氐阿里騰鳥志登波倭礼波志羅須夜
紀貫之集貫之帰自紀伊国時馬病将斃路人僉云此所坐之神為崇貫之思此所無社又無読而欲祈亦無幣帛因濯手跪而問名答曰蟻通明神乃詠和歌曰
　加枳句毛利阿夜梅毛志羅奴於保曽羅尓阿里登保志鳥波於毛布倍志耶波
於是馬遂能行古事談曰貫之還和泉国時也云々
　余見一雑書名萬書統宗者其中云孔子以絲係蟻貫

九曲ノ環而未詳所拠然又吾為聖人不敢取也

貫之集にいはく紀のくにゝくたりてかへりのほりしみちにて俄にむまのしにぬへくわつらふところにてみちゆく人々たちとまりていふやう これはこゝにいますかみのしわさならんとしころやしろもなくしるしもみえねとうたてあるかみなりさき〳〵かゝるわさしたる人いのりまをすなるといふにみてくらもなけれはなにわさもせててあらひてかしこまりてそも〳〵なにの神とかきこえんととへはありとほしの神といふをきゝてよみてたてまつるにむまのこゝちやみにけり

かきくもりあやめもしらぬおほそらにありとほしをはおもふへしやは

追分　高師ノ松原ノ内安松ノ前ニアリ 自是右ノ方濱辺ヲ行ハ阿波嶋ノ明神ノ路ナリ

左ノ岐ニ入レハ紀州ノ和歌山路也

信太森　佐野ヨリ根来ヘ赴ク方大鳥居ノ社ノ辺ニアリ

後拾遺夏　能因

夜ハあけてきかん時鳥信太の森のかたになくなり

詞花　内大臣

秋風にあへす信太の杜のちえにわかれて千枝の数さへ

同　増基法師

我思ふことのしけさにくらふれは信太の杜の千枝ハかすかハ

通房

千載 思ひやく千枝にやしげきよもすがら信太の森の[illegible]

保季

新古 今ぞしる信太の森の時雨にも[illegible]しつゝ神のことて

経平

同 いかへつゝありてそまされうらさなき信太のもりの千枝の秋風

赤染衛門

同 うらみてそふりし信太のもりかげを[illegible]すゞの風

入道前太政大臣

続古 風さそふ森の杜の[illegible]のこして[illegible]雪

大納言通[illegible]

続後撰 時鳥[illegible]信太のもりの[illegible]

続千載 下ともの[illegible]しも[illegible]信太のもりの千枝の白露

[illegible]女

同 千枝に咲花とぞ見ゆる白雪のつもりて信太の杜の梢は

頼子女

続後撰 さりともよしげき思ひのあまりにはしのぶ信太の杜の秋の夕暮

後[illegible]院

新拾遺 夕立の名残ひさしく雲晴て信太のもりの千枝の下露

慈鎮

新後拾 千枝よりてそよぐとぞ聞く時鳥信太のもりの一声ぞする

知家

同 時鳥いまや[illegible]信太のもりの明方の空

範宗

新續古 うちよする波の音や残るらん信太の杜の千枝の下草

慈鎮

拾玉 めぐらしや信太の杜の千枝の陰に一本桜の花と見ゆ

家隆

中義不可也 浪かへ信太の杜のしぐれは雪の下葉も[illegible]ぞ見えける

定家

夫木 いさ桜信太の杜をうつしうゑて千枝よりや花の咲き見ん

寂蓮

同 おなじく信太の杜のわかれて千枝の露や神の深かん

頼政

同 千枝をも信田の杜の下露や涙ぞ岸の[illegible]

同 おしなべて信太の杜の葛の末ひとしれず秋しぐれけるかな

玉葉

為季

同 いつとなく信田の杜は千枝なるを玉ぬきみだる露の白玉

家隆

同 葉そむる信田の森も秋風て露霜ハあへずみだるゝ

為家

同 いにしへの師の海の浪ハ信田の星を行[illegible]

同 霧むすぶ深き森の木の間にも信田の杜の千枝の秋風

俊光

紫不方角御まいらく　従五下林　里　萬　時雨　雪

この處楠木ありし校の秋風ふきてあれらこく

海上寺　大崎　田井川　津田

阿波嶋　大明神ノ社アリ　此社辺ヨリ南ノ海中ニ

井ノ首嶋　会嶋　泊嶋　トテ嶋三ツアリ

明神ノ東南ノ出崎ヲ俗タリラ崎ト云是ハ古歌ニ読ル

由良御崎ナリ是ヨリ淡路嶋土佐ノ海ヲカケテ由良ノ渡

云也由良ト云所ハ淡路嶋ノ洲本城下ノ南ノ四ツキノ

浦ヲ云サレトモ名所集ニ由良ヲ紀州ノ内ニ入タリ

好忠

新古　ゆらのとを渡る舟人かちをたえ行衛もしらぬ恋のみちかな

同　ゆらのとを渡ゆくしほのみちまゝに舟の泊もおきにながるゝ　摂政太政大臣

同　紀の國や由良の湊に拾ふてふたまさかにだにあひみてしかな　長方

新勅撰　妹かため玉をひろふと紀の國のゆらのみさきにこの日くらしつ　よみ人しらず

續後撰　玉もかるゆらの湊にさす月の光をそへてよする白浪　平宰相

湊雪　紀の湊やゆきの汐風月清くなりまさる沖つしら浪
師光

同　風さえてゆきふる湊の夕波に釣する舟の月のこゝろさ
平政村

同　浜清くすむ月影を明ぼのやゆきの湊に舟ぞ出る
後徳大寺左大臣

湊路秋ふかくゆきの湊の汐風にかたしくとこは秋の月かげ
雅宗忠家
蔵之

同　とふ人もなきゆきの湊のうら枕ありあけの波のうきねかな
小侍従

湊路波さむきゆきのみなとにかゝる舟の跡あるかなきかの

湊　まつ夜やゆきふる湊に風さえて月のかゝりの雲もはれゆく
通雅公

同　出しほや波路の末は遠けれど有明の月にこゝろ乗る人
平政村

湊路朝まだき出てこぐ舟の塩風に出しほの浦に見る人
後京極院
兼忠

同　ゆきの湊秋の月にさえて行舟も見えず雲の波路に舟人
為氏

湊路浦かぜの音より風やゆき出てゆきの湊を見る人
為氏

秋湊やゆきの山や雲の上をへだてゝみのいとゞたけき浪のうへ外
丞宗母

同　　　　　　　　　　　　　　　　後小松院
紀の海やゆらの湊に秋朝霧のうちに船こくらしも
　　　　　　　　　　　　　敬仲
堀河百首
風吹ハゆらの門わたる舟のあとなくなる浦けさの霞
　　　　　　　　　　順徳院
建保百首
桜咲山ハ霞にかくれつゝゆらの湊にあまのしらなミ
　　　　　　　　　　定家
同
花の香も霞みし入江のさむしろハあまもゆらの湊にほふ色
　　　　　　　　　　順徳院
同
秋あらしこの葉にさそふ風になるゆらのみなとの有明の月
　　　　　　　　　　安嘉門院四条
夫木
紀のくにやゆらの浦風吹ぬらし霧のたえまにあまの釣舟

同
捨小舟ゆらの湊に残されて
　　　　　　　　　　前関白右政官
同
いく汐路ゆらの湊をこえぬらん上野の原にたつ
　　　　　　　　　　覚瑜法師
同
うこのと人さすらへて雪のまゝゆらのみなとの
　　　　　　　　　　雅有
同
ゆらの山松原の松の松風にさえまさる人も世をすてけれ
　　　　　　　　　　道房
新撰六帖
ゆふ日のゆらの湊にあきつしまひとつもいつも秋
　　　　　　　　　　平時明

安松 自佐野到于此 一里

是ハ佐野ノ追分ヨリ左ノ岐ニ入テ紀州和歌山路ノ順次也

畷路 安松畷ト云路ノ左右ノ深田ニテ八町ノ間要枢ノ所也

樫井 自安松到于此 八町

川 樫井川ト云歩渡也

王子坂 坂ノ頂上ニ池アリ日出王子ノ池ト云

志達 自樫ノ井到于此 廿町

或ハ子立ト書ト云ヽ

枇杷垣 険難ノ山路一騎打ノ所也要把所ナリ

山口 自志達到于此 二里

是ヨリ泉山中ニテノ間坂路所々峻岨アリ

泉川 和泉紀伊ノ堺城也

山中 自山口到于此
一里半

自是和歌山城下マテ一里半ノ間坂所々アリ
和歌山領

鯛瀬渡 舟渡ナリ此川吉野川ノ末ナリ大河
テ川船ノ上下往来アリ自山中騎到于

此渡行程一里此渡ヨリ和歌山ニテ半里ナリ

和歌山 自山中到于此
一里

紀伊殿 御居城

或ハ若山

此御城不知監觴 大閤秀吉公御治世ノ比大和大納言
秀長ノ持分也秀長ハ大和紀伊和泉三州一円ヲ領ス

慶長五年 卅七万四千石 同十年ノ差出シ高也
桑山法印

幸長ハ弾正大弼ノ子也轉甲府移當城
浅野紀伊守幸長

公高
浅野但馬守長晟

長晟ハ幸長舎弟也秀頼公ニ仕テ為小姓三千石ヲ領
然ルニ幸長死去而欲断絶テ時依

大権現君之尊命長晟相続之云〻

元和五年 五十 五万五千石

紀州和哥ノ作共ニ

紀伊大納言頼宣卿

仝高

紀伊大納言光貞卿

若浦　城辺ニ近キ海濱也

赤人

万葉　和かのうらに塩みちくれはかたをなみあしへをさしてたつ鳴わたる

連敏法師

拾遺　老のなみよせしと人ハいとふとも待らんものを和かのうらにハ

師頼

金葉　人ならハ心ハうらハ思ひてもそれいぬ和かのうらにそすむ

紀州
和哥浦玉津島
吹上　高野山

同　みなとやくものさしもとみえしも和歌のうらにそいりぬる
近江
同　和歌の浦にいつまてもまちぬ風吹は浪のよするもおもはまし
猪九右
成仲
千載　和歌の浦はあらしになみやたつらん鳴かへるなる和歌の浦なる
家長
契りにし葉そくるしきつまに君代のかすまさるとそ思ふ
花光
同　和歌浦にかせふく風にみられつる月に見る
益円
同　日のかけふく月の影しろのうらまて波よくつもるさゝなみ
宗筆
同　日の浦と松のこしまにむかひゐしは松かせにあまのつる
家隆
同　和歌の浦や松のこしまにあひてこそいつくも秋はよせて
宗賀
新勅撰　和歌の浦にしほのみちくる波のうへにちるてる月の影そかはりぬる
為家
同　和歌の浦よりあまのすみわたるをつよく思ふや
隆成
同　契りをゆく葉の下にまつの和歌のうらにこゝろあまのすみか
近江
同　和歌のうらにやまちかけそあたひたる
資行
同　和歌のこゝろまて見えかねさかひてうかへるは人かくれたる
為兼

続後撰 和かのうらや塩干のかたにあさりする鶴もしらぬ声もきこえつゝ
知家

同 吹上の浦や遠方のうらつたひとまらぬ友をあまのすさひに
為経

同 和歌の浦や海士のしわさのもしほ草かきてもみせよたえぬ心を
中原師季

同 すなほなるみちにあつめてそしほ草かきおきつれはなをもこそなれ
平泰時

同 わかのうらにちとりしほ草いつよりかしほのみちひにたえぬなさけを
後京極院

続拾遺 いにしへの和歌の浦風身にしみてふかきあはれをもしほ草
隆祐

同 藻塩草かきあつめてそ君か代の深き恵のみちもしられん
平時直

同 なかくそ絶ぬ和歌の浦ちとりしほにまかせてあとは見えけん
光俊

同 和歌の浦ちとりに浦ちとりをもはてし
秀茂

同 種あるへき人のことのはかしこき君かよにしらなむ
左兵衛督

同 和歌の浦に身をこそよせつ藻塩草かきあつめてそ見るへかりける
経朝

続拾遺 和歌のうらや昔にかへる波のうへにひかりさしそふ秋の夜の月
後花山院入道

ゆくさきのこゝろも世に絶せぬとまことに
巻し綴らん　為氏

同　和歌の浦に雅のみちのつたはれる世々の跡をそ神もまもらん
法皇御製

同　和歌の浦によるとはなしにつもりけり今そしる世の
雲白

同　家の風和歌の浦やたちかへしき波に昔の跡をとゝめても
為之

同　和歌の浦に退ていまし昔の露の手向よの言の葉
澄成

同　和歌の浦にみくの玉の緒たえぬ世に我こそ知れて君がため
入道前右大臣

同　和歌の浦の波は末まで絶えせぬを絶えぬをかしこ
俊成

同　ゆくすゑのもとの道をわすれすは昔に今を和歌の浦かせ
為家

同　和歌の浦や五代までに七代まであまの跡つき
為世

同　我世には集めぬ和歌の浦千鳥むなしき名をや跡にのこさむ
院御製

同　思ひのみみちひしかはの昔のわさにそ絶えぬ和歌の浦波
玉助

同　何事のあとにはすてぬ思ひ出に和歌の浦波
入道左大臣

法きめしのこゝろ為世に余儀を申とて
養し侍ける　為氏

同　和歌の浦に独老田鶴のよるのつるこを思ふ声をきくぞかなしき
遊し　法皇御製

同　和歌の浦によるとも見えぬあしたつの思ひは雲井にも今ぞきこゆる
関白

同　藻塩草和かのうらや老らくの年のかずかく思ひしれ　浦のしほかせにて立ち(?)かへらむ
芝家

同　和歌の浦にあとつけてすみし芦田鶴の雲井よりなほ音ぞきこゆる
後成

同　和歌の浦に和歌のをしへを残してや老の人々も言の葉にかゝれ
入道前左大臣

同　見れはやゝ来て(?)かへりて和歌の浦に玉つ島光をそへん
為藤

同　和歌の浦にみちくる波のつきせぬは昔をいまに残すなりけり
為定

同　和歌の浦あしへをさしてさしのぼる月の影をや猶かゝるらん
中院殿

同　若の浦にあとつけ初しいにしへを今なほ思ふ人のこゝろを
前関白

同　わかの浦ひの煙の末ぞ思ふ志しあるぞ和かの浦
後嵯峨院女

同　人ことに思ひ出ては和歌の浦の入江のあしのねにぞなかるゝ
為相

同　ゆく川も光やそはむ和かの浦やかひある玉の数にあらて
為子

同　和歌の浦に玉川むつ川もみかゝれん玉の光たえすも
為家

同　玉拾ふ袖もえすや和かの浦に吹ならぬへき文和歌の浦の風
資波

綾義和歌の浦や寄る埋もれて玉を拾ふ光を見えて知れともし

同　和歌の浦に寄る玉藻てちかひの玉柱いく世を守る安穏なれ
西助
通世

同　古の和かの浦ちる玉ををさむる絶えぬ和かの言の葉も哉
貞俊

同　流れくるはかりはよすれとたえまなき数々寄る和かの浦なみ
為世卿に海かきしるしける　式部卿親王
平貞時朝臣子ゝ世々のあとまかふへこの
道の帰依浅からぬよし聞えけれは時影を
さつけて和歌のよし侍りける浦を
宗経

同　これ見てあつめし名残りのことの葉を代々のあとある和歌の浦波
忠景

同　和歌の浦に又拾ひつる玉川の石ひろひしみるするかな
忠定

同　ゆく末のかひある和歌の浦に帰り来てこそ見れと思ふ
法皇御製

同 集まりし翅の林ちりもせす千年ふらし 和歌のうらまつ
為氏

同 和歌の浦にみかゝ言葉玉津島ひろひを集てあつめぬる千代の数かな
貞直

後撰 浅ひわかれ和歌の浦よのりかきつくれともことひかはせん

同 なすからぬ身を何おもふと和歌の浦波にひかれて名を残すへき
源資氏

同 このもとにあつめしこと葉ひろひてそてをまれなる和歌の浦哉
為房

同 白雲のかゝるへきてそこえつゝもたかき和歌の浦松
隆資

同 うきよのゝ神ハ残しそれ世ゝにかはりゆくのことは和歌のうらなみ
定資

同 代々のあとしるしハ和歌の浦なみに今も寄せくる玉も数なき
法眼行済

同 和歌の浦や代々にかくれぬ玉も今の時をうしなはて心をつくさせん
近し
法眼源兼

同 あし原の世をおさむる道そと詠み置きし和歌のうら波
光忠

同 和歌の浦や玉井をまもる神ハ今もたのもしき
忠守

同 和歌の浦に世をこえける跡のまゝ立かへりけり
紀行長

風雅 跡つけんとこそ志て世を渡るなる和歌のうらはの友なりけり

同 いにしへの集にも和歌の浦人の心を思ひ出すや　惟方

同 今もなほ昔は忘れぬ和歌の浦のあとをしたふや和歌のうらなみ　資成

同 こころのおりつのこしてあらひなかれさえ千年のこころ　平久時

同 和歌の浦にたつ代せて立かへりいつもいひなし　宗村

同 和歌の浦なれこの名をのこす千年はのかれはいくへひとなりけれ　後徳大寺左大臣

為家　三首

同 和歌の浦に身をさへすててあまとなりていつまで苦しき　通俊

同 和歌の浦に立つ白波の声はこころにもみえけりそれぞ　教政

同 いにしへて立つ名をふんで出しと思ひはなれぬ我が敷島の道　[illegible]前太政大臣

同 昔にて今は和歌の千年にも光そへたる敷島のみち　源家氏

新勅撰 古の名をとどめて和歌の浦のうらみすてつつなかぬ人なし　前大僧正慈意

同 君か代の集の和歌のうちに跡つけしあとをなすらふ　前大僧正覚俊

同 和歌の浦の夕なみ千鳥立かへり心残してなくなく之
土御門院

同 妹とこひ和歌の浦松ことそとつまとふ声に鳴く
為世

同 和歌の浦に又この秋もきて見れは霧立こめて月そ
後照念院関白

同 和歌の浦に思ひよりしも浜千鳥あとつけそめしこゝろそ
為藤

同 露わけ和歌の浦ハの浜千鳥あとあるまゝにあとをしたふよ
為定

同 和歌の浦やあまの浦に浜千鳥跡つけそめし人ハ思はて
為世

同 立かへりあと残しつゝ見えて浜千鳥こゝろをしたふ和歌の浦なみ
太宰権帥

同 和歌の浦に行しとまへハ浜千鳥かよふ跡こそあらはれにけれ
藤原親時

同 和歌の浦や浪路絶えせすかきつめていつれのまゝにみちをしらせよ
為文

同 和歌の浦や汀のこるに思ふ身もさすかにあとをあまた見て
家隆

同 和歌の浦や入江のあしの下葉のつゆかゝる光をあふくやはみし
花山院

同 手向て世々にのこる言の葉をふむ見立てにしあとそのこせ
法印宗恵

あし鶴の声よのとかにそへぬ気とおもふ和歌の浦人　紀氏

今よりは秋の風にそつたへまし名をとゝめけむ和歌の浦なみ　権少僧都[illegible]

よへの松はさかへん君か代を和歌の浦風いく千代　よみ人[illegible]

言の葉の種は名をやのこすらん記代の和歌の浦なみ　遊義門院

玉ぬれ川ありて和歌の浦に光みちてはさらに集つる　一家

玉よする光ある代の風をたのしき和歌の浦松　為氏公

玉よする玉さへ光そへて古代[illegible]和歌のうらなし　為定

和歌の浦の浪に思ひかけくらへ玉の光をとゝめつる　後[illegible]院

和歌の浦やとしへ[illegible]みかきつもりし玉の光のつゝ　[illegible]上人

名をとゝめし昔[illegible]和歌の浦なみ　為子

和歌の浦に年へて波の名をとゝめて[illegible]　為氏

名をとゝめて[illegible]の浦に[illegible]の波[illegible]　[illegible]

同
渚すくる世の思ひ出にかゝる名もかな和かのうらを
為氏
同
我ゝる和歌の浦風吹しより川よそ(?)の後をたつ
同
尋ねてもさむ(?)跡の言葉なきは和歌の浦なみ
法印浄弁
同
いふせん人のこゝろのみをしらしめとそ浅き心哉
惟宗光吉
同
数ならぬ我身の程に越かねて思ひ知る和歌の浦なみ
雅家
同
和歌のうらにかよひし跡はみちも見えて昔の後に名を残すらむ
沙弥法師
同
和歌のうらや跡つけそめし道の今ハまた誰か昔のなる
性遵法師
同
和の浦に古きにかへる人の心八ゝはる浦まし
法印栄清
同
和歌の浦や昔の人の跡見れとも尋ね来ぬる浦よ浪
雅家
新拾遺
若の浦によする年なみかさねても幾代をかけむ和歌のうらなみ
法印宗昭
同
和歌のうらに二たひ我みつるこそあさからぬ昔の世の嬉しさ
後西園寺入道
同
和歌の浦に思ひよるへきみちもなし神とゝめし神そしるらん
法親王尊胤

同 人ならは名をやらましを和哥の浦にかきゝはしらす友なしと見る

同 人しれぬ思ひのみして浜千鳥跡をそはらんとはかりける

信快法師

通茂女

同 和哥の浦に心ひかれて浜千鳥跡ふみとめて世にもあるかな

為世

同 立かへり和哥の浦わに三代まてそ跡ふみ付てあとをのこさむ

実継

同 和哥の浦に尋ねてみれは浜千鳥むかしのあとはありけりなつかしき

為親

同 和哥の浦にまつこそたちて浜千鳥世にひろめつゝ

親賢

新後拾遺 和哥の浦にかきとめてをく浜千鳥人の跡をもつたへん

為氏

同 しるへせよ和哥の浦路の友ちとり昔の人の跡をたつぬる

小槻匡遠

同 古のあとをあふく和哥の浦にかきつくしてそ名をのこさむ

為藤

同 夜をかさね和哥浦路の友千鳥立かへりゆくあとはいつの世

左大臣

同 和哥の浦の松に吹くる風の音に心をそへてなれにける

源義詮

同 人なみの数にもかゝる和哥の浦の入江の月に心をやまし

寛尊

同 藻塩草ひろひかさねて跡とめよ千とせをへても和歌のうらみそ
讀人不知

同 みかくなる玉もひかりそ和歌の浦の月ハいくよもあきらけき迄
同

同 及ふへき浪を越ゆれは松かえに名をかけてまつ草に和の浦浪
長明

同 忘るゝな紀の海士の和歌の浦にまよふもやすくあまの友舟
よみ人不知

同 さても又跡ハひろふ和歌の浦にまよふもや世々のすて舟
頓阿

同 和の浦やまよひちはし濱千鳥波よるかたもあとやのこさん
家隆

同 さても猶残る跡ある和歌の浦の波まへよりそつもりかさねん
為重

同 敷嶋の道ハよしやしら浪和歌の浦にあとをとめても
二条院讃岐

同 今ハとて浪路にまよふ葦鶴の雛立しより和歌の浦をそ
家隆

同 君か代は名高き玉もみかくよにつたへてそ和歌の浦さと
知家

新後拾 若の浦にあしへのたつのこゑたてゝ波よりさきに
後入道

同 和歌の浦に跡をとめても人しれすおひさきあるは跡なれハ
公泰

同 聖[illegible]わかの浦風吹つゝそ拾ひてむは我代の[illegible]

為明

同 和歌の浦に集ひ見むは許のみちある此代は光あらん

頓阿

同 人しらぬ和歌の浦の根も[illegible]絶えぬ跡そ世に残さんや

為定女

同 和歌の浦や古来の松よ雲つゝ[illegible]今そ[illegible]

よみ人しらず

同 みな人の[illegible]ぬは[illegible]のよ[illegible]

雅家

同 [illegible]川[illegible]のや[illegible]の[illegible]松

ただ[illegible]

同 立かへる和歌の浦波[illegible]川のいにしへ志らせん

経継

同 立かへり[illegible]千年[illegible]和歌の浦[illegible]

隆博

同 和歌の浦や古き代々の跡[illegible]我[illegible]

為[illegible]

同 跡[illegible]和歌の浦[illegible]代々[illegible]

雅世

同 絶えて[illegible]世々の跡[illegible]

頓阿法師

同 雲井[illegible]和歌の[illegible]芦[illegible]

宗[illegible]親王

同 和歌の浦や雲井のよそにきこえけむ何まよふらむたつのこゑも　行文

同 和かの浦はちりにけりやもしほくさあまのすさみにかきあつめけれ　雅孝

同 わかの浦に身は七十の老の波なほこえてかくまつ　秀茂

同 和かの浦や風をさまりてしつかなるなみにもまれてそのあまのつりふね　常蓮

同 さてもなほ波をかけける和歌の浦に我ほかたれかすまんとすらん　後京極

同 玉の浦の藻くすもなかれ来て世にすてぬへき宗卿

同 吹風や和歌の浦浪かつよせてあしへやたつの声たてらむ　尭孝

同 和かの浦に出てやよしのたちのみちのこと世にあまくたりせん　あまくたりし人

古浜 和かの浦に和かのかみの御まもりをおもひそまさる　行高

末木 和かの浦あまの塩屋に立けふり霞の浦にたなひきにけり

同 玉のえに 舟まつ浦に　具氏

同 和歌の浦のいつくしまのあまのすむ磯のしたてのうらみよりける　光俊

同 若の浦の入江にかゝるあやめ草今年はてまひかれぬる
このうたハ続古今の撰者ハかくれなき
蓮念の中書王の詠なり 菖蒲とよめり
ことなし

頓阿法師

同 よそにみる今はなきたる若の浦によせつゝむ月の花咲よかし

為家

同 吹よする芦べの荻のそよとなく吹まよふらん若の浦風

雅経

同 田鶴のなく和歌の浦風吹寄し絶間寄する波の白玉

定家

同 和歌の浦によせてはかへるあまた鶴月に寄りくる若の浦風

蓮念右大臣

同 玉津嶋和歌の松原ふきかへる月もちらなん
よゝ人ぞしる

同 若の浦に袖ひちて玉貝拾ふと跡まて見えよ

為家

同 若の浦に旅の空なりそうきものかなあまのさ
ひしさ

玉津嶋神社 在若浦

當社ハ衣通姫霊神也和歌ノ道ヲ守リ給ト云こ

神社考曰
大室国押開豊桜彦天皇神亀元年十月幸紀伊国詔曰登
山望海此間最好不労遠行足以遊覧故改弱濱名為明光
浦宜置守戸勿令荒穢春秋二時差遣官人奠祭玉津島之
神明光浦之霊
玉津嶋神者衣通姫也案日本紀允恭天皇之后忍坂大中
姫之妹容姿絶妙無比其艶色徹衣而晃之是以時人号曰
衣通郎姫天皇喚郎姫郎姫畏皇后而不参天皇強而七喚
以来之因皇后之嫉別搆殿屋於藤原而居八年春二月
幸于藤原密察衣通姫之消息是夕衣通郎姫恋天皇而
獨居其不知天皇之臨而歌曰和餓勢故餓句倍枳豫臂
奈利佐瑳餓泥能區茂能於虚奈比虚豫比辞流辞毛天
皇聆是歌則有感情郎姫奏言妾常近王宮而晝夜相続欲
視陛下之威儀然皇后則妾之姉也恒恨陛下之為妾若是
以冀離王居而欲遠居天皇更興造宮室於河内茅渟而令
居了一年三月幸於茅渟宮衣通郎姫歌之曰等虚辞陪迩
枳弥母阿閉掃毛異舎儺等利宇弥能波摩毛能奈留等
枳等枳弘時天皇謂衣通郎姫曰是歌不可聆他人皇后聞
必大恨故時人号濱藻謂奈能利曽毛也先是衣通郎姫若
于藤原宮時天皇詔大伴室屋連曰朕頃得美麗嬢子是
皇后母弟也朕心異愛之冀其名欲傳于後葉奈何室屋連
依勅而奏可則科諸国造等為衣通郎姫定藤原部

よミ人しらす
万葉集 玉津嶋よくミていませあをによしならなる人のまちとはゝいかに

同
古今 和田の原よせくる浪のしは〳〵もみまくのほしき玉津嶋かも

躬恒
後撰 玉津嶋ふかき入江をこく船のうきたる恋も我はするかな

顕季
金葉 玉津嶋きしうつ浪の立かへりせんかたなきは我もかくこそ

参議為氏
新後撰 人とはゝいかにいはむ玉津嶋霞むいり江の春のあけほの

後京極摂政
続古今 いにしへの和哥の浦風身にしめてあふきそめくむ玉津嶋姫

隆信
同 萬代も和哥の浦路に跡たれて君をまもらし玉津嶋姫

前内大臣基
同 このたひと波よせかへる玉つ嶋みかくことの葉をうけなし

後嵯峨院
玉葉 三代まてに古への名をもあらはせとうくるこゝろを玉つ嶋姫

崇徳院
同 あふきてもあふきても猶玉つ嶋まもれ神の心にめくみ

為家
同 玉津嶋家にこゝろやのこるらむ波路めくりき和哥の浦風

同
続千載 みかきもる跡をたえぬ玉つ嶋それもいつもの道をこそまもれ

同　和歌の浦に文をひろひし玉津嶋あつめし光を今もてらさむ　惟宗忠景

続後拾遺　雪つもる和歌の松原ふりにけりいく世経ぬらん玉津嶋もり　源寛太之后

風雅　玉津嶋ことをもなひいかにしてこゝろふかんとあふ家の風

新千載　玉津嶋中なる月の影の新古に世に我あふ世の恵み風　親長

新拾遺　名もしるき光をそへて玉津嶋今もまもらん和歌のうらかせ　為定

新後拾遺　老の波さこそたつともわかの浦にいまこそよするしるしをも玉津嶋　為実

新続古今　しき嶋の道をしるへに玉津嶋あふくこゝろのあさからめやは　頓阿法師

新後拾遺　玉津嶋入江に見ゆるおもひあふ和歌のうらやまふらん　権大僧都堯尋

同　我それいにしへをもつらくて玉津嶋ひろき跡のめくみをそみる　鹿苑院前左大臣

同　我もまたみよのあとをもそへむあれはてし跡にみつく玉津嶋姫　後光明照院関白

同　今もなほ代々の光をうつしとて我みちてらせ玉つ嶋姫

同　きこしめす君もあふゆゑいにしへの

これらハ玉津嶋のれいなるへし

夫木　玉津嶋見えの松原あさなきに月かゝる明かた　権大納言

同　玉津嶋いりえの波のますみにもみえのかゝ玉つ嶋かな　よみ人家

同　玉つ嶋入江の小松老にけり古き御幸のことやとはまし　為相

同　芦田鶴のこゝろをしるは玉津嶋世々につたへてあとなかりけれ　兼昌

新撰六帖　玉つ嶋岸のすさきをわけゆくまゝ君をいのるもふかきかなしも

日前宮　玉津嶋ニ近シ　名草濱ト吹上ノ濱共ニ云ト也

神代巻曰　神入ニ天石窟一而閉ニ磐戸一天下恒闇時思兼神思而白曰宜下圖ニ造彼神象一而奉中招禱上即以ニ石凝姥一為ニ冶工一採ニ天香山之金一以作ニ日矛一又全剥ニ真名鹿之皮一以作ニ天羽鞴一用此奉造之神是即紀伊国所坐日前神也

紀伊国名草宮日前国懸大神者是也

神代巻曰　五十猛神天降之時多将ニ樹種一而下然不殖ニ韓地一尽以持帰遂始ニ自筑紫一凡大八洲国之内莫レ不ニ播殖一而成ニ青山一焉所以称ニ五十猛命一為ニ有功之神一即紀伊国所坐大神是也

又曰素戔嗚尊之子号曰ニ五十猛命一妹大屋津姫命次枛津

姫命凡此三神亦能分布木種即奉渡於紀伊国也
神名帳曰紀伊国名艸郡伊曽太祁神社是也或曰日月前
国懸之末社也

後撰　波よれハ人なくさの浜なれハ浦ハうらなれとたのまれけれ　よみ人しらす

同　紀の国のなくさの浜ハ君なれやことのいふかひありときゝつる　俊成

新古今　あまのかるみるめをなみにまかへつゝなくさの浜をたつねわひぬる　式子内親王

玉葉　なくさめハ今ハ名草の浜なれとうきにしつむそなけくなる　内大臣

続千載　浦つたふ跡も名草の浜なるを汐みちくれは跡なくなる　紀俊文

風雅　名草山ふもとや柳のつきもせぬ和歌の浦はに日のかけの宮　安嘉門

新千載　あはれとも今ハなくさの浜風に松をとしふる昔をそ思ふ

吹上

古今　秋風の吹上にたてる白菊ハ花かあらぬか波のよするか　菅原朝臣

新古今　浦風に吹上の浜のはま千鳥波たちくらし夜半になくなり　紀伊

基俊

後撰 契りてしいまはとならん紀の国や吹上の浜の秋の夜の月　行意

同 夜な夜なのみ恋ひてつてにしらせばや吹上の浜
　　後九条内大臣

続後撰 紀乃国や吹上の浜の浅茅原おもひもかけず浜風
加賀乳母 紀伊国や…時雨れて
　　後嵯峨院

新続古今 …吹上の浜風に…
　　雅縁

新後拾遺 …吹上の浜風に霧わたる紀伊の…
　　玉津

堀河院御製 浜風の吹上の浜の浅茅原…

山家集 浪よする吹上の浜の松風に…
　　西行

同 何となく吹上の浜は秋かけて…
山家集にいふ名のみ…社の…
同 …吹上の風吹く…

夫木 ちりかゝる吹上の浜の風なれば…
　　小侍従

同 あはれなし吹上の…
　　為家

同 秋風の吹上の濱ちとり夜半にはくもる月のかけかは
中務卿親王

同 おきつ風吹上の濱のまさこちは夜さへ秋の浦かせ
如願法師

同 夕まくれ吹上の濱の松風の音もさえ行月の影かな
後鳥羽院

同 紀の國やあまの浮橋の松風吹上のまさこ月にくたくる
後九条内大臣

同 汐風の吹上てくる濱荻あたりにきえて波のしら露
光俊

家集 秋風の吹上の小松の葉かくれてさゝなみよせて雲井さゆらん
家隆

新拾 家集 秋風の吹上の峯の西の海横雲しらむ山のはの月

茂津　自堺到于此　一里

是ハ高野山ニ赴ク路ナリ堺ヨリ是マテハ　暇路ナリ

此所ヨリ高野山マテハ　五十町ヲ一里ト定ム

大野芝　松原曠々トシテ　一里餘ノ間續タリ

茶店村々所々ニアリ

三日市　自茂津到于此　四里

川　歩渡

川 橋アリ

清水 自三日市到于此
一里

川 歩渡 小川也

坂 小坂ナリ

木目峠 自清水到于此
一里

紀川 大河船渡也

名所方角抄によれは紀の川吉野より出る
うちの君の町より少しこの右より吉野山へ三里之
不動坂へ上る也とありてことに紀ノ関とは不審

吉野とかけるは中宮より紀の関とは云ふ文義の
見渡しとかけるは
逍遥院殿吉野紀行にいはく紀伊川を見おろしつゝ
ゆくに六田の渡りといふ所は川の流れまことにあはれなる
川端にやすみてむかしの河の水の瀬絶えむことなく
あらはれしとなん
こゝかしこ見わたしつゝ皆こゝは紀の川の上なりといひて
郭公の声なといふもしめやかにてこゝ
ぞかしとてこゝにしてもこゝろさしありて
いくたひも此ところに時鳥の声をきゝてなむと

橋本 自木目峠到于此
二里

神屋 三里 自橋本到于此

高野山 一里 自神屋到于此

禿茶屋 高野山ノ麓ナリ自是山上ヘテ 五十町

橋 此橋下ヲ流ルヽ川ニテ参詣ノ人垢離スルナリ

女人堂 是ヨリ上ヘハ不行 女人ハ是ヘテ来テ遥拝シテ

不動坂 橋辺ニアリ 急ナル坂ナリ 此坂ノ上ニ 枯岩トテアリ弘法ノ御母ノ枯給ニ岩下ニ云傳フ

鏡石モ此坂ノ上ニアリ 奇石ナリ

遍照院前ニテ紀行にいはく [illegible]
十八町此坂ハ早八町より其上一里 [illegible]

僧 結解 [illegible] 周桂法師 [illegible]
[illegible]

追分 大門口ノ前ニアリ自是右ハ若山口ナリ

千本枚　自追分廿五町到于此

新別所　自追分廿八町到于此

是ハ若山ノ方ニアリ

大門ロ　是ヨリ奥院マテノ支次第ニ記之

東室　左ニアリ

中門

西ノコソヤ

三鈷ノ松　大師唐ヨリ投給　三鈷此松ニ留テアリ

故ニ名ツケト也

金堂

大塔

西院　右ニアリ

御影堂　　西ノ御堂

東堂　　西塔

観音堂　　護摩堂

五ノ室　左ニアリ　　三昧堂　　北室

六時ノ鐘楼

奴刹橋

追分　ヌリ橋ノ辺ニアリ　自是右ニ走クハ熊野ロナリ

往生院　左ニアリ　廿日大師堂　左ニアリ
小田原山ノ堂　右　苅萱堂　右
蓮華谷　右
寳塔院
大橋　左ニアリ　新別所口　右ニアリ
大墓
玉川　是ハ毒水也　石碑ニ大師ノ御哥ヲホリツケテアリ
忘れても汲やしつらん旅人の高野の奥の玉川の水　弘法大師
このおの風雅集ニ入りし哥なり

熊谷石塔　平敦盛石塔　並テ　右ニアリ
曽我祐成石塔　同時宗石塔　並テ　左ニアリ
多田満仲石塔　右ニアリ
御影ノ井　左ニアリ　法然上人ノ石塔
住吉ノ社
熱田社
八幡宮
太神宮
春日社
黒子口　春日社ノ左ハ汶ヲ云也

右五社並ニテ左ニアリ

南随院　右ニアリ

五臺山　山ノ塔　南随院ヨリ南ノ方ニアリ

鉞盛杉　左ニアリ

虵柳　右ニアリ　當山ノ科人ヲハ此虵柳ノ辺ニテ
殺伐ス慈悲殺生ト号スト云〻

中ノ橋

的場山　右ニアリ　楊柳山　左ニアリ

木食庵　右ニアリ是ハ秀吉公ノ時興山上人トテ京洛ノ
大佛造営ノ事ヲ掌リ且冨士山ヨリ大材ヲ伐
ラセテ大佛ノ棟木トシタル上人ノ庵ノ跡ナリト

天川辨才天宮　右ニアリ

明辨杉　微妙ノ橋ノ前右ニアリ古木ナリ此杉
ニハ常ニ天狗住テ悪人橋ヲ渡ル時ハ
必ス障碍ヲナスト云〻

徹妙橋 或ハ無明橋共云

水向不動 右ニアリ

追分 自是右ノ岐ニ入ハ新別所也

閼伽井 右ニアリ 弥勒堂 左ニアリ

奥院 右壇ヲ登レハ禮堂アリ 奥院ノ鳥トテ昔
ヨリ二アリテ不断此辺ニスム 燈籠堂ハ右
ニアリ 常燈アリ當ノ開基ヨリ以来此火消ル事ナシ
左ニ親鸞上人石塔アリ 骨堂 左ニアリ 日孟月孟
堂 人瑞籬ノ内ニ万年草ト云テ名草アリ 経藏右

丹生ノ社 奥院本堂ノ[illegible]アリ是當山ノ地主高野明神
アリ 丹生ノ明神共申也

神杜考曰言丹生ト者在大和国近江国紀伊国
紀ノ州丹生明神者弘仁七年空海師遊紀州求勝地漸上高
野山岩峦峭峠林木榛蕪不知所之時婦人出来曰妾者
山神也夙負殺罪若処幽陰思帰真乗未逢其人今師到
此妾之幸也此山方数百里願施師蔵罪乃尊海至山中
平埴所曰是福地也営構於此初唐元和元年八月海将帰
朝設ノ舶之日手執三鈷祈祈願曰空教入日域久為流傳
願此杵先占霊区使向本邦擲之其杵飛入雲中到此其
杵懸松枝於是知神女之言不虚也使拳建金剛峯寺
安寶塔高十六丈為密乗興繁之勝場神女者丹生時
神也

天竺山　摩尼山　奥院ノ上ニアル大山ナリ

右ノ外當山事跡多シ　四岩　児ヶ滝　外ノ不動
花折　竹山　太刀ノ堂　南谷　ナトアリ　大畧如此
惣而當山ノ女人結誠ノ地ニテ　口々ニ　女ノ禁足ノ定
有之

或書曰柳高野山ハ弘仁七年卯月ノ比空海城外ニ出テ
禅定相應ノ霊地伽藍ノ建立シ給ヘキ所ヲ求メ給フ
ニ大和国内ノ郡ト云所ニ狩人ニ逢給フ其相形不尋常
長ハ八尺許ニシテ青衣ヲ著シ弓箭ヲ帯シ黒白ノ狗二疋ヲ
ツレタリ空海不思議ニ思テ何カナル人ソト尋給ヘハ
狩人答曰吾ハ是大飼也山野ニ年月ヲ送ル空海重テ曰
ク我伽藍建立ノ志有テ霊地ヲ求ム勝地アラハ我ニ教給ヘ

狩人荅曰自是南ニ當テ勝地アリ三面ニ山連リ西辰巳ニ開ケ万水東ニ流源一水ニアツマル晝夜ニ奇雲聳エ是ハ紀伊国伊郡ノ郡ノ南ノ山也貴僧往テ住給ヘ伽藍成就シ法灯永ク耀サシトテ犬ヲハ放テ狩人ハ行方不知ナリヌ空海教ニ任テ彼山ヲ尋テ紀ノ川辺ニ到ル今ノ慈尊院ノ地也空海山野ヲ巡リ見給フニ彼狩人ハ連シ犬ニ忽然而出来ツ空海ニ従フ犬ノ導ニ随テ山ニ登リ平原廣澤ニ到ル始狩人ノ云シニ不違猶奥深クシテ修禅相應ノ霊地ナリ空海洛ニ帰リ吾入定ノ地ナル事ヲ奏シ給則伽藍ヲ建立アリ始狩人ト見エシハ高野ノ大明神ナリ

此山草創ノ時諸木ヲ伐地ヲ平均スニ一樹ノ古松アリ夜々枝上ニ光サス怪ミテ見ヘ給ニ唐ノ元和年中ニ彼国ヨリ擲給フ三鈷杵ナリ今ノ大塔ノ庭ノ松是ナリ

大塔ノ高サハ十六丈一双ノ甍ハ雲中ニ聳ヘ九輪荘リハ雲外ニアサヤカナリ塔ノ内ニハ二丈四尺ノ四佛堂立脇守ハ八尺五寸ノ四菩薩ノ尊像也此塔ハ弘仁七年ニ営始アリテ三年ヲ経テ造畢ス七寶荘嚴善尽シ美尽ス寺号ハ金剛峯寺ト云

大師入定シ給フ事ハ五十六億七千万歳後弥勒菩薩ノ出世ヲ待給フト也猶當山ノ縁起ニ委シト云ヘ古歌ニ其暁トヨメルハ大師ノ弥勒ノ出世ヲ待給フ同縁ナリトソ云〻三會ノ暁ノ事也トソ

高野にまいりて侍りける 相(?)の院に静蓮
法師か籠居(?)りけるにまかりて侍りける(?)
こと共申侍りてつかはしける
権大納言実家

千載 この世にて又あふましきかなしさにすゝめし人そ心みたれし

ゑ(?)かしこ(?)入道法親王高野にまかりて侍りける
ともなひ(?)てまかりて 崇徳院御製

同 あか月(?)ふ(?)はは岩(?)のかけ(?)道(?)わたりなき(?)三世の仏の月や(?)見るらん

仁和寺後入道法親王覚性

同 思ひやる我三世の仏の跡にしもいかなる雲か(?)しつかにや(?)ゐるらん

寂蓮法師

新古 暁を高野の山に待程や苔の下にも有明の月

世をのかれて高野の山に住侍りける時よみ侍りける
宰相成頼

新勅撰 高野山杉(?)まて人の入にしは嵐の末(?)も月にそありし

正三位知家

続後撰 昔たに高野の山の岩とにて(?)暁まちし(?)有明の月

高野にこもりて侍りける
源親範

同 今さらは高野の峯の月影に法(?)の光をさしそへて(?)見む

続古今 我(?)頼(?)むは法にして(?)高野山(?)岩(?)の(?)おもひ(?)に
この身は高野山に入(?)て(?)後(?)すてゝ(?)

祈親上人あまた(?)としを経て住侍り(?)ける(?)

この山は卯月にて暮よつ戸のひさしにかゝむ
草結の庵にこれのひし後高野山にかくれ
ける時にて疎遠のこともせられ
あくはりけるよめる

皇太后宮大夫俊成

續古今
さとれかく君かためにか高野山のりの山の峯には
空海の化にこれ結し高野にゐまして
此をそてまつりて神よりわかれにけれ

源仲兼

同
波のかみにも君か墨染の袖のうちに
入れ京教王高野山にこそ結ひにこそつけ
よめる

宗高記之

續拾遺
ゆくへを高野の奥の時雨かん結に雲のたちて
返し
時雨かん結の庵にも志れ高野の奥に

一条親王性助

心円法師

同
高野山暁の結の末もいつれ
太宗院にこれ宗の後高野山に
出て通りて付あ

貞覚上人

新後撰
君か文結ひやこ高野にあるを

俊成

玉葉
君か代ハこ結の山の岩屋の

八条親王性助

續義　題しらす　法の花ひらくるよしも吉野山此所を法の花よりて
西行法師　吉野山みねの法院しらさき
桜の梢よりて此世の花は夢よりさめぬれ
ぬは思ひつき侍り　源通顕
〃　吉野山に白雲ふかくあまの川はなの淀の夜ははれなし
吉野の落花の前に夜のあらし吹く花の色そなき
源頼兼
〃　夜の花我もの雲かそれとのみ見えつつかかる吉野山かな
法の師匠の花開くるへき
〃　源里子(?)　法のためにへなり吉野山にまた花
〃　新宮(?)法花御経を吉野山こころを尽くして見れは
吉野山其のかへりて法の花さかて

風雅　阿一上人
こよひや知らぬ人の乃法の花ぞさきける桜の木
中務卿宗尊親王
新義　法の名は浄土にて吉野山花さきたるやみぬは暁の宮
源正宗縁
新續古今　吉野山花咲ぬれば暁の雲のさかりは月もすみにけん
元可法師
〃　吉野山ふかき世の花の雲にも暁の花の空色の
拾玉集　こよひやさらに吉野山法の閼伽棚法のかたはらの花ぞ
吉野よりうつりそめにける法の落花
つもる色は

山家集　ちる花の庵のうへを吹ならは風いるましくめくりかこはん
吉野の中流しも都にも見ゆるさかひの岸
ちりけり桜のちりけるをめくしく岩根てよし
りけり　　西行法師

同　桜ちる中にまかせて菖蒲にも花あやめをやみなれん
寂念　紅葉のさうらんこそちりけるかな
入り又峰の嵐のおろすかなりけり
　　　　西行法師

同　紅葉みし高雄の峰の紅葉を人のまつなるかな
思ひし　　寂念法師

同　花みし花の紅葉の思ひ出る花の枝に思ひ知らる
吉野のおくのかくれ家に桜も月もかなしかりけれ

ちりはまし　なかめてこそわかれを西住上人
立出てつらかれ枝の月　忘れかねて又あはれ
桜の月のころ　西住上人にひつらりけり

同
思ひ出てかはらて桜のもとにあひみし月の数
　　　　西行法師
山家集に入るは寂念大原にて後結句　ちり
吉野山ちりけり

山ふかみさこそあらめと聞えつゝ音あはれなる宮川の水
山ふかみ槙の葉わくる月影ははけしきものゝすこきなりけり
山ふかみ苔のむしろのうへにゐて何心なく鳴ましらかな
山ふかみ岩にしたゝる水とめんかつ〳〵おつる橡拾ふ程

山ふかく岩ほにさかぬ花をみむ かりくらしつゝ山かけの庭

山ふかく人もかよはぬ道なれは 花なきときはたれかしるらむ

山ふかくこゝろきよきまつかけに 谷の流れはすゝしかりけり

山ふかく住身なりとも雨すきて 谷の下水たえすなかるゝ

山ふかくのこるこのはの峰にいる 風のたよりにちる紅葉かな

山ふかく古郷の雲にたちわかれ 世をすてし身のすまゐなりけり

この卯月上人と吉野にて花見侍りしに おくりし 返

ことのはくちくるかたの

為家

家集 千鳥なく河辺の宿のかせさむみ 吉野の山の峰の月影

未来 咲花をみるゆへにこそ吉野山 柳を桜に見しまて 口

口 ことしより花さく宿の桜木は よし野にまさる色を見せなむ 法師

口 入月を峰の雲にかくしても 花さく宿の松そまたるゝ

吉野山 峰のしら雪けふはまた 霞のうちに春そきにける

咲ぬれは宿の梢の花の色を 見せはや人にかはらぬ春を

光源氏 たつねきて花の色香にあかすとも 世のうき事はわすれさりけり

花ならぬよしなきことにつけても 人のこゝろのひくかたそある

さくらさくころはつねにも 春の山

口 花さきて吉野の山の峰つゝき 雲にまかへる春のあけほの

良宗 桜花咲

ふるさとの山 春ならて こゝろつけしはかりに

能因法師は宮城野にいたく
なかむ山へまかり侍りけるに法文の法ししして
まうでまゐりけるにこゝろつらかりけり
のちのちかすかにめつらしき日はなりいけり
うちつれて後にそありけれはこゝろさきの色は
まちこうりさ色そあはれにまさりて行さ
くもりくもれは深え侍りいひたくせんには見えしと色
乃なかいめせし卿うちきこえはあやすそ佐けし
あさひさんとさせりしむ侍ることにしてさそ
苦しく侍りてこゝろにさてはかくれ侍るさとにけるこゝ
ゆめそ乃ことそ法の跡をもあらし侍つる世なきも
とこそ入ありし後はあらしきてしかれはかくていはんか山は

宮城野はなかなかとみしかしとみ侍りて有く
乃浪をそれは浦わたり風の吹たまへらはなをもあり
乃ありては人の日うち晴ぬへしこのは宮城野の山は谷の松風
侍るをふかしは山は色はそれてあるひとの枯野に
かつふかくは松あはれてきて苦しき世のと法にしてゐん
秋のはのまはりゆめして有のそり侍り山は道とて
さうして深え山は葉けてゐは侍し後はらしと頂は
古き山はさうして山のそ秋はすゝりて見さめて侍る
行てさてはゐひたる浦へかは野ますゝきて道へ
とはこゝはうきし
なみの山は侍る法りかれ文にあたりて書あかりてありけると

されて左右にある所にいたれる絵元出きたりとかや
いさゝかにつゝ筆のあやとられは中七人にあたり勢
まさに大師乃御作のたえ佛具さいやのかり
けちゆふ料紙にかくきへていらぬまゝ前の絵とされ
まかり始乃ひめぐらしらしたてるにかなひてこれのかう
周割が筆たりてわらしにけなきもの筆なる
天にかた人まつりかくなるにお山家染は周割つゝ之
らぬ一たりかけ法蔵寺御将の出雲とまで焼にかと
かれある天がたも筆なり番匠番に上りて結ひと
なさまれ給ひしる書畫筆術にいとしひきと
出雲にまで給ける兵将の取花草も勧めされ
筆続ける文筆にすゝめよまでの山さかりそれ文なし

あかしこ御番匠似て作の周割ここの三筆とうか
それとなく作品とあり深結前に大京の番ニ六年
紋又筆のなくかくりしてをもしく此調ぐ
同筆なりあいまいさて文字この書何ゆえ
あるかの法性寺殿筆なりまかいからり給ふしたる
筆なりひつゝ海そよりし世のへ出ちかくの頁
以てかたかしくなり給えの御作後光院の旧ゆへて
よ給へまで前のひしやいかにし信実卿の
かにが殿の同筆乃四筆として書旧筆の製なりの
あまた給ひて此筆そくなり高野庵主寂蓮
因子のいかなる法川をはじめに入ちの字を道後
承りまりもかひあり人つき此様なくの

書は三跡を本として いにしへつたへきたる所の手跡
道風卿をこのむ人は行成卿の手をまなひかたく
この外後京極殿の御筆をしたひ 七条女院へ 嵯峨
天皇の御手をまなふも有 伏見院の御筆を学ひ 後京極殿
の筆をうつしたる人 世尊寺の 流は行成卿を
始として後世にいたる 大師と弘法大師の筆ありしを学ひ
法性院の御筆をうつしてよしとし 此外にも
ありける人々の筆をまなひて後の手本にもなせり 末の世にも
書道の手を学ぶ人 其の流を伝へて今に至れり
ひとへにその人々の筆を学ひ 其の流をたつねて
学ひつゝ 其の人の書を手本として 七十あまりの
道の学ひ 海内にひろまりて 其道の人は 本をたつねて

書の家の道は 手跡の流にしたかひて 行成卿は
世尊寺の流をもて 代々の家の手をつたへて後に
書道の家となれり 此の手跡をまなひて 後世の人へ
あまたのうつしたる手本を十二巻とし 世尊寺の手本
の中よりしるしたる流の中をまなひて 其外にも
心やすき人のさまにしたかひて 世尊寺流を 能書にて
ありけるもしてその人の流の人々によりて書をまなひて
かの人の書をよくまなひて 海内にひろまりて
世の人の能書は 大師の筆にならひて後の書は
其の家の流の人へ其文字の中にしるしたる文字を
よしとして いにしへよりつたへきたる世の人の手本となれり

あつめしをきくしゆるしたまへるハことにおもひて
いろはに紺紙にかきて四十八をとつゝけいたして
歌読りたまふ
以備これ佛法の御のりのめてたさハ高麗人にまうし給ふ
ありそうひみ神々ハとそ法の道に船をよせてのりそめ
はるにとえをおもふ深き雪の所のいのちをいけのこゝろはなれ
まして秋月の歌きこえて歎きにこそよるしき
湖北の波路寒くも月をこひし夜山のし
侍るに松に淵もおもふ歌になれ[illegible]佛

そもそも世の中をいふはなほまさりかやうまし
ちひそく生死こゝろをいたして往生をとけてこそ
ありもとをもとに我そのまゝこともとなんこゝろに経にも
めでたくこゝろに世の中の道にいりてまことの人
前の世の衆生のまことに末の代にハ[illegible]
とまりぬハみな我身をやかて[illegible]人の心
和歌の徳ひとつに[illegible]
かれにまつさきの[illegible]世のならひ
その中ハ[illegible]

たゞなくて出家をとげてこそ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]我[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]秋の[illegible]月[illegible]
[illegible]

御[illegible]つくしあまた所に[illegible]
の[illegible]世[illegible]世[illegible]
[illegible]
[illegible]海[illegible]
世の[illegible]
[illegible]我[illegible]
[illegible]山[illegible]
[illegible]
[illegible]我[illegible]

海人のえらひ釣をたれてあまたのいさりふね
てまとひたるさまなと浪にうかひて帰るさにまかせて
あはれなる事のかきりなく海の浪あらきさへ空の気色
さなきまつ帰らんや世をおもひすてゝ
こゝろもとなくて思ふ事のみあまたかさなりけり
ゆめさめて後ひとり思ひ出る浪の音をきくにも
めをみしとみなけれ共たゝ人のうへに
きぬのめや何ゆへにかくはかなき人のうきよをなけき

思ひてはこれも世やうきみのかなしき身のうへをも
見るにつけても思ひ出るそのかみのすかたは浪まに
うき世にあるをみは浪のかなしけれは思ひ出る
あはれなるもあらん事のかなしさにいかゝはせん
たゝ人の心のうちのおもひをはかりかねて
京の内も知人をたつねても帰りかたきを
浪のうへにうかひてもとしらぬ身のほとを
見るにも宮城野の夢はあたなるこの世
またうきよのなかのうきをかこつこともなくて
つれつれとものをおもひてすこしもやすからぬ

逍遥院殿ハ高野紀行といふ
かくて山中にいりて高きひくき風をしらてはてしなく
都の人の宿とする所の大塔の前なる宿につきて
一夜ハあかしくらしてかゝる中にも山の奥にまうてつゝ
まうてつ
まつ此坂をのほりて志ハしやすらひて高き院の此をみれ
からくして風まかせにゆくにハ高野の山路の行つきて
一の院乃奥院へいかにしてもくるしき中にもめくりて
都の人の志るしにまうてしかハ
高野山浄土院の浅き様に尋てめくりて良く御都に
古へより草鞋つくれる法師の此れに行きしハ
大塔の跡をも心にかけてまうてて遠山の峰やかに
とみなり今ハ堂ハくちはてゝちりはてゝ見るも哀なる
三鈷の松とて昔乃ハ中にもありけれ此の様なる
めくりし事共にて
志ハしくれの声の暁や夢の世の中のあはれ
奥の院へまうりしに立ちとまりてこゝをはしめて見し
ゐるてありけれさあくうくるまなき
なりてやこなた見えつる神のみこ立ちの山路
清厳乃前の堂のあたりの塔乃見えて尊く
光もつくりし所にたち法師の住持の柱の
心の言の葉をしるしをきてまつる
あまねく心をよする山の光のひとつもくもりなき
国をゝさめし御代のはしめの道のおこりの事より宴遊を

かゝやつきて
秋の人はむかしこゝろの所作をもて仙境にやらいはゝまうくに
この世の利り 并歌 歌を書て書つけられける
ちかきに并歌 歌を詠まいらせてさら詠給ふ人々に歌をかへ
さもいつくしうをかしけり
うちまもりおはしけり 一首のやうにお歌ありけるとて
河の外に いつくしうおはしける 歳も いつとなくおもひ給へ
二河ハ観音の誓にありしくいつくしうおほして書詠給ふ 暖
所よるの事もいはふてあはれなるあゝ給ふをかくれむことく
河ハつらゝにほそにあらしむかひとなるつゝくみえけるかのこゝろや
又しらぬ所にあふ所を道にあへるにとそハ我なかにさそひつる
又其かの所にまかれける日の光明かきらめきしうかハ

ひて雲の上にも道にいつ給ひしかの所に秋の夜ありかへしてかへりたまふ
大事をはかれし月の出たる夜には
吉野山にお嘆の月を見るにもいつも袖に久しくかゝる
宮城野にいつるとて
衣ひかしへ人の松の枝をとりて帰らんとおほしのとゝめいたるせん
称名院殿吉野紀行にいはく
桜井の村をきて吉野山本のあたりぬかへし坂を越
なのりをしもしりくおほくこれ何そといふハ西行のみ名
ハ宮迫ハかうしてのかたつくかぬまことうちゆへけり
つきんとするものかひに宗見といふつゝきもかたひのところひとつ
うかみしてかのさもとたえあなたへゆくもしやてあかつの
かたき所ハしらす〳〵と

こゝは遊遅院といへり [illegible]

[illegible] 奥院 [illegible]

[illegible]

[illegible] 神 [illegible]

[illegible]

[illegible] 刹 [illegible]

[illegible] 灯籠 [illegible] 大原 [illegible]

[illegible]

[illegible] 十 [illegible]

[illegible]

一 [illegible] 山 [illegible] 中 [illegible]

[illegible]

横嶺縦峯不耐登　友人携手又支藤

再来尤善桃花郎　前度劉郎一箇僧

[illegible]

[illegible] 山 [illegible]

野 [illegible]

[illegible] 山 [illegible]

[illegible]

遊 [illegible]

[illegible] 禁 [illegible] 河 [illegible]

[illegible] 水村山郭 [illegible] 棋 [illegible]

[illegible] 桃 [illegible]

[illegible]

いろひろう 紀伊国

旧記曰 高野山 嵯峨天皇弘仁七年草創号金剛峯寺

弘法大師ノ開基 寺領二万千七百石

大師入定 仁明天皇承和二年三月廿一日

大師ノ号 延暦廿一年十月勅使中納言平惟扶

大塔雷火 一條院正暦五年七月六日堀河院康和五年七

再興供養 同 近衛院久安五年十二月 平清盛奉修理

同炎上 後柏原院大永元年二月十二日

同 女帝寛永七年九月

御幸 堀河院寛治元年二月 幸白河上皇開祖大師御

影堂

太平記曰暦應三年ノ春備前国住人佐々木飽浦三郎
左衛門尉信胤小豆嶋ヲ攻取海上ノ通路開ストテ船屋
刑部卿義助同四月一日ニ勅命ヲ蒙リ四国西国ノ大将ヲ
奉テ下向トフ聞ケル、義助吉野ヲ立テ紀伊路ニカヽリ
通ラレケルカ加様ノ次テナラテハ早晩カ志ヲモ遂ン
當来値偶ノ縁ノモ可結ト被思ケレハ先高野山ニ詣テ
三日逗留シ院々谷々拝廻ルニ聞シヨリモ尚タウトシ
八葉ノ峯空ニソヒヘテ千佛ノ座雲ニ捧タリ無漏ノ扉
苔閉テ三會ノ暁ニ月ヲ期ス或ハ説法衆會ノ庭モアリ
或ハ念佛三時ノ砌モアリ飛行ノ三鈷地ニ墮験ニ生々
ル一株ノ松廻縁ノ餘煙風去テ軒ヲ焦セル御影堂香煙
窓ヨリ出テ心細キ鈴ノ声霧篭リテ物冷シ昔瀧口ハ

道カ住タリシ庵室ノ跡トテ尋レハ舊キ板間ニ苔ムシ
テ荒テモ漏ス夜ノ月彼ハ古ヘ西行法師カ結置シ柴ノ庵ノ
名残トテ立寄レハ拂ハス庭ニ花チリテ踏ニ跡ナキ朝
ノ雪サてくノ霊場所々ノ幽閑ヲ見給ヒ衰世ヲ遁スヘ
クハ角テコソアラマホシト宣シ惟盛卿ノ心中識ト思
知レタリ暫クモカヽル霊地ニ逗留シテ猶モ憂所ノ
汚レヲ濯タリハ思ハレケレ共軍旅ニ赴ク身ナレハ
不叶シテ高野山ヨリ紀伊路ニカヽリ千里ノ濱ヲ打過
田辺ノ宿ニ逗留シ渡海ノ船ヲ調ヘ給フニ熊野ノ新宮ノ
別當湛誉湯浅入道定佛山本判官東四郎西四郎以下ノ
熊野ノ人共馬物具弓箭太刀長刀兵粮等ニ到ルマテ我
不劣ト奉リケル間行路ノ資ヘ早散也カクテ順ニ成ニ
ノ

ケレハ熊野ノ人共兵船三百餘艘ヲ調ヘ立淡路武嶋
ニ送リ奉ル此ニハ安間志知小笠原ノ一族共元来宮方
ニテ城ヲ構テ居タリシカハ様々ノ酒肴引出物ヲ尽シテ
三百餘艘ノ船ヲ淡ヘ備前ノ児嶋ヘ送リ奉ル処ニハ佐
々木薩摩守信胤飽浦梶原三郎自去年宮方ニ成テ
嶋ノ内ニハ六入ル人モナシ大船数多泛ヘテ四月二十三
日ニ伊豫国今張ノ浦ニ送リ着奉ルト云々下畧

豊臣家譜曰天正十三年四月十日秀吉督ニ責高野山ニ其旨
趣曰
一海師午卯所載可為寺領其外年来所ニ押領ニ者速可還
本若不然一山既背ニ海師之法ニ非ニ滅亡之基ニ乎
一寺僧行人等不嗜ニ学問ヲ貯ニ置甲冑弓鉄炮ニ非ニ沙門ノ之
支業可謂悪逆無道也向後勤学問不可携ニ武具ニ
一朝敵国敵山徒怨心離之輩ニ不ニ隠於山中ニ時僧徒扶ニ助之即
是與同罪也自今以後制禁之若夫喪ニ親夫子或向背於主
人或蒙ニ耻辱ニ失ニ面目ニ或剪ニ髪遁ニ世真実発道心之族雖
在山ニ非ニ制限ニ也以北叡山根来寺之滅亡可為眼前之烱
戒
右条々衆徒行人等於同心者須捧請状満山谷不残一人底

則秀吉亦可與隆也云々
十六日学侶方検校法印良運行人方法眼空雄以一山之
衆議就細井新介捧請状各守条々之嚴命永不違失
満山之老弱一同奉仰恩恵若於有違背者雖被成敗
不可有遺恨也云々
文禄三年三月三日秀吉登高野山以青岩寺為旅館為
父母冥福故有焼香之礼又召一山僧徒八千人賜糧米以
為大政所之資福也秀吉到奥院経過金堂大塔見金堂
之額則問曰我今登山何不改額之乎即施穀一万石木食興
山上人掌之秀吉曰我将催猿楽慰衆徒乎白学問之労
憊木下半夜奉之因是金春太夫等皆錺華于青岩寺
於舞堂有猿楽衆徒無不悉聚観其後秀吉発高野
到兵庫遂帰大坂
秀吉於大坂本丸使金春八郎奏自己所新撰之吉野花見
高野参詣明智柴田北条征伐五番之謡曲下略
同年関白秀次依謀叛企於高野山自害ノ事又アリ

国立公文書館
National Archives of Japan